

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 1

田子山遺跡第 19 地点

田子山遺跡第 21 地点

田子山遺跡第 25 地点

中道遺跡第 27 地点

大原遺跡第 1 地点

2 0 0 0

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山 太蔵

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、人口6万5千を擁する自然と文化の調和する都市です。この地には、遙か2万5千年もの昔の旧石器時代から現在に至るまで、我々の先人たちが生活を営んだ場所や奥津城（墓地）など、人間の一生に関連する様々な足跡が数多く埋まれています。こうした足跡は、現在まで志木市では、16ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として認定され、郷土の歴史の理解を深める上で大変貴重な資料となっています。

しかしながら、近年、住宅建設をはじめとする各種の開発行為が盛んに行われ、都市化するとともに、埋蔵文化財の保護・保存が困難となっている状況になり、やむなく当市では、後世に遺すための緊急的な発掘調査での記録保存を行っています。

本書は、平成4・5年度に実施された発掘調査のうち、共同住宅建設・駐車場建設・道路造成工事に伴う田子山・中道・大原遺跡の3遺跡5地点の発掘調査報告書です。

主な内容についてですが、まず、田子山遺跡では、縄文時代早期の炉穴や平安時代の住居跡・土坑など、当時の集落の様子を伝える貴重な資料が相次いで発見されました。

また、中道遺跡では、中・近世の土坑・地下式坑が発見されています。これは、当時の村落跡の一端を知る上で貴重な資料になるものと思われます。

大原遺跡では、時期は不明ですが、1本の溝跡が発見されたことにより、初めて遺跡として登録されるきっかけの発掘調査になりました。

以上のような、貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たな1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますように切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々の多くの方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する田子山遺跡（県Na09-010）第19・21・25地点、中道遺跡（県Na09-005）第27地点、大原遺跡（県Na09-016）第1地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、各開発主体者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
3. 本書の作成において、執筆は尾形則敏・深井恵子が分担して行い、編集は尾形が行った。なお、朝霞市博物館の野沢 均氏には、中・近世の遺物についてご教示をいただいた。

尾形則敏 第1・2・6・7章、第3・4章第2節の検出された遺物

深井恵子 第3・4章第2節の検出された遺構、第5章

4. 整理作業は、尾形・深井の指導の下、太田敦子・尾崎美智子・鎌木あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子が行った。遺物の実測は、尾崎美智子・鎌木あけみ・星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のトレースは深井が行った。写真撮影は尾形が行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

H＝古墳時代～平安時代の住居跡 D＝土坑 M＝溝跡 P＝ピット FP＝炉穴

7. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・朝霞市教育委員会・新座市教育委員会・和光市教育委員会・朝霞市博物館・富士見市立考古館
志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校・志木市立宗岡小学校

浅野晴樹・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・梅沢太久夫・江原 順・柿沼幹夫
小川貴司・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小島清一・小宮恒雄・
笹森健一・斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・鈴木敏則・隅田 寛・高橋 学・田中広明・照林敏郎・
時枝 務・並木 隆・根本 靖・野沢 均・土師由美・原田一敏・早坂廣人・廣田吉三郎・福田 聖
藤波啓容・牧田 忍・松本 完・松本富雄・水口由紀子・三田光明・村上伸二・山田尚友・和田晋治

田子山遺跡第19地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第21地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第25地点（開発主体者 東京都板橋区中板橋22-6

株式会社 住宅建設 代表取締役 永嶋 祥雄）

中道遺跡第27地点（開発主体者 個人）

大原遺跡第1地点（開発主体者 個人）

志木市遺跡調査会組織

〈役員〉

会長	秋山 太蔵 (志木市教育委員会教育長)	
副会長	星野昭次郎 (志木市教育委員会教育総務部長)	(～平成7年3月)
	川目 憲夫 (")	(平成7年4月～)
理事	神山 健吉 (志木市文化財保護委員会委員長)	
	井上 國夫 (")	
	宮野 和明 (")	(～平成5年3月)
	尾崎 征男 (")	(～平成10年3月)
	高橋 長次 (")	
	高橋 正 (")	(平成5年4月～平成8年3月)
	高橋 豊 (")	(平成8年4月～)
	内田 正子 (")	(平成10年4月～)
理事兼事務局長	並木 勝司 (志木市教育委員会生涯学習課長)	(～平成8年3月)
	鈴木 重光 (")	(平成8年4月～)

〈監査〉

監事	根岸 正文 (志木市立郷土資料館長)	(～平成5年3月)
	武川 洋子 (")	(平成5年4月～平成8年3月)
	萩原 洋子 (")	(平成8年4月～)
	根岸 清躬 (社会教育指導員)	(～平成5年3月)
	野口 泰 (")	(平成5年4月～平成6年3月)
	鈴木 憲三 (")	(平成5年4月～平成9年3月)
	佐藤 茂 (")	(平成6年4月～平成10年3月)
	永田 伸夫 (")	(平成10年4月～)

〈事務局〉

担当課	志木市教育委員会社会教育課	(～平成5年3月)
	志木市教育委員会生涯学習課	(平成5年4月～)
理事兼事務局長	並木 勝司 (生涯学習課長)	(～平成8年3月)
	鈴木 重光 (")	(平成8年4月～)
事務局	山中 満 (生涯学習課長補佐兼生涯学習係長)	(平成5年4月～平成6年3月)
	尾崎 健市 (")	(平成7年4月～平成10年3月)
	岡本 孝 (生涯学習課文化財保護係長)	(～平成9年3月)
	関根 正明 (")	(平成9年4月～)
	佐々木保俊 (生涯学習課主査)	
	清水あや子 (生涯学習課主任)	(平成8年4月～)
	尾形 則敏 (")	
	今野 美香 (生涯学習課主事)	(～平成8年3月)

〈田子山遺跡第19地点の調査〉

調査担当者	尾形 則敏
調査協力員	大島 和子・望陀ヤシエ・佐藤 満子・栗原喜久子・青木 和子

〈田子山遺跡第21地点の調査〉

調査担当者	佐々木保俊・尾形 則敏
調査補助員	深井 恵子・内野美津子
調査協力員	伊野部三千子・宮川 幸佳・中村マキ子・古田トシ子・村井 京子・吉谷 顕子

〈田子山遺跡第25地点の調査〉

調査担当者	尾形 則敏
調査補助員	内野美津子
調査協力員	鈴木美佐江・東浦久美子・竹内美代子・成田しのぶ・星野恵美子・吉谷 顕子

〈中遺跡第27地点の調査〉

調査担当者	尾形 則敏
調査補助員	深井 恵子・内野美津子
調査協力員	伊野部三千子・宮川 幸佳・中村マキ子・古田トシ子・村井 京子

〈大原遺跡第1地点の調査〉

調査担当者	佐々木保俊・尾形 則敏
調査補助員	内野美津子
調査協力員	石原 和子・海野ひとみ・大野 涼子・桑原美保子・鈴木美佐江・鈴木 陽子・竹内美代子・二階堂美知子・星野恵美子・松崎 陽子・森 文子

目 次

はじめに

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	4
第2章 田子山遺跡第19地点の調査	9
第1節 調査の経緯	9
第2節 検出された遺構と遺物	11
(1) 住居跡	11
(2) 土 坑	15
(3) 遺構外出土遺物	16
第3章 田子山遺跡第21地点の調査	18
第1節 調査の経緯	18
第2節 検出された遺構と遺物	19
(1) 住居跡	19
(2) 土 坑	25
(3) 遺構外出土遺物	26
第4章 田子山遺跡第25地点の調査	27
第1節 調査の経緯	27
第2節 検出された遺構と遺物	29
(1) 縄文時代	29
(2) 平安時代	30
(3) 遺構外出土遺物	34
第5章 中道遺跡第27地点の調査	36
第1節 調査の経緯	36
第2節 検出された遺構と遺物	38
(1) 土 坑	38
(2) 遺構外出土遺物	39
第6章 大原遺跡第1地点の調査	41
第1節 調査の経緯	41
第2節 検出された遺構	43
第7章 まとめ	44

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と調査地点 (1/20000)	2
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	9
第3図	遺構分布図 (1/200)	10
第4図	18号住居跡 (1/60)	11
第5図	18号住居跡カマド (1/30)	12
第6図	18号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	13
第7図	10・11号土坑 (1/60)	15
第8図	10号土坑・遺構外出土遺物 (1/3)	16
第9図	遺構分布図 (1/200)	18
第10図	19号住居跡・カマド (1/60・1/30)	20
第11図	20号住居跡・カマド (1/60・1/30)	22
第12図	21・22号住居跡・12号土坑 (1/60)	23
第13図	住居跡・土坑出土遺物1 (1/4)	24
第14図	住居跡・土坑出土遺物2 (1/3)	25
第15図	遺構外出土遺物 (1/3)	26
第16図	遺構分布図 (1/300)	27
第17図	1号炉穴 (1/60)	29
第18図	14号住居跡 (1/60)	30
第19図	23号住居跡 (1/60)	31
第20図	24・25・26号住居跡 (1/60)	32
第21図	住居跡出土遺物 (1/3)	33
第22図	1号炉穴・遺構外出土遺物 (1/3)	33
第23図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	36
第24図	遺構分布図 (1/200)	37
第25図	34・35・36号土坑 (1/60)	38
第26図	遺構外出土遺物 (1/3)	40
第27図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	41
第28図	遺構分布図 (1/200)	42
第29図	1号溝跡 (1/60)	42

表 目 次

第1表	志木市の時代別にみた考古資料一覧	5
第2表	志木市の発掘調査報告書一覧	8

図版目次

図版1 田子山遺跡第19地点

1. 調査区近景 2. 発掘調査風景 3・4. 18号住居跡遺物出土状態 5. 18号住居跡

図版2 田子山遺跡第19地点

1. 18号住居跡 2. 18号住居跡カマド（掘り方） 3. 10号土坑 4. 11号土坑
5・6. 18号住居跡出土遺物 7. 10号土坑・遺構外出土遺物

図版3 田子山遺跡第21地点

1. 調査区近景 2. 発掘調査風景 3. 19号住居跡遺物出土状態 4. 19号住居跡カマド
5. 19号住居跡

図版4 田子山遺跡第21地点

1. 20号住居跡遺物出土状態 2. 20号住居跡 3. 21号住居跡 4. 22号住居跡
5・6. 12号土坑A遺物出土状態 7. 19号住居跡出土遺物

図版5 田子山遺跡第21地点

1. 20号住居跡出土遺物 2. 21号住居跡出土遺物 3. 12号土坑A出土遺物
4. 12号土坑B出土遺物 5. 鉄製品・石製品 6. 遺構外出土遺物

図版6 田子山遺跡第25地点

1. 調査区近景 2. 発掘調査風景 3. 1号竪穴 4. 14号住居跡 5. 23号住居跡 6. 24号住居跡
7. 25号住居跡 8. 26号住居跡

図版7 田子山遺跡第25地点

1. 14号住居跡出土遺物 2. 23号住居跡出土遺物 3. 24号住居跡出土遺物
4. 1号竪穴出土遺物 5. 遺構外出土遺物

図版8 中道遺跡第27地点

1. 確認調査風景 2. 発掘調査風景 3～5. 36号土坑

図版9 中道遺跡第27地点

1. 34号土坑 2・3. 35号土坑 4. 36号土坑出土遺物 5. 35号土坑出土遺物 6. 遺構外出土遺物

図版10 大原遺跡第1地点

1. 調査区近景 2. 発掘調査風景 3・4. 1号溝跡

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.7km、東西4.7kmの広がりをもち、面積は9.06㎢、人口6万5千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（No.7）、中道遺跡（No.5）、新邸遺跡（No.8）、城山遺跡（No.3）、中野遺跡（No.2）、氷川前遺跡（No.4）、市場裏遺跡（No.15）、市場遺跡（No.1）、田子山遺跡（No.10）、富士前遺跡（No.11）、大原遺跡（No.16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（No.12）、宿遺跡（No.14）、関根兵庫館跡（No.13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳（No.6）、城山貝塚（No.9）を加えた16遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成5年度以降区画整理事業に伴う発掘調査が進められている西原大塚遺跡でも、石器集中地点が確認されており、ナイフ形石器をはじめとする石器類が発見されている。これらの資料は、現在整理中である。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器1点、田子山遺跡から有茎尖頭器1点が出土している。早期では、田子山遺跡から燃糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から燃糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曽利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この



富
士
見
市



第1図 市城の地形と調査地点 (1/20000)

土坑からは、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡の空白期を迎えることになる。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後葉にかけては、縄文中期を超えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡で比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、6世紀後半以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰軸陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸鞆、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、鋳造

関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム探掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する田子山・中道・大原遺跡について概観することにする。

まず、**田子山遺跡**は、志木市本町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。遺跡は、北東方向に新河岸川を臨む台地上に立地し、標高約15mの平坦部に南北約100m、東西約50mの範囲に広がっている。田子山遺跡の「田子山」とは、敷島神社境内の擬厩富士である「田子山富士」を指し、この付近の字名に因んで名付けられている。遺跡の現況は、古くから個人住宅が密集している地区であるが、最近ではアパート・マンション建設といった中規模開発が盛んに行われ、畑地は極端に減少している。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和63（1988）年に実施され、以後の調査により、縄文時代早・中・後・晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、近世の複合遺跡であることが判明している。

中道遺跡は、志木市柏町5丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は、柳瀬川流域の右岸に立地しており、標高は北端で約13m、南端で約14m、低地との比高差は約7mである。遺跡の現況は、都市計画道路富士見・大原線（ユリノ木通り）の開通とともに各種開発が盛んに行われ、畑地は急激に減少している。

本遺跡の発掘調査は、昭和62（1987）年の都市計画道路富士見・大原線（ユリノ木通り）に伴う調査（第2地点）を契機に本格的に実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

大原遺跡は、志木市本町4丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約0.8kmに位置している。遺跡は、標高約16mで、新河岸川の右岸流域に分布する遺跡群の一つであるが、富士前遺跡や田子山遺跡の一部を含め、北側の谷津に面して存在する遺跡であると言える。遺跡の現況は、畑地などの閑地はなく、住宅が密集する地区である。

なお、この一帯は、本遺跡の朝霞市側では、大山第2遺跡として知られており、過去の発掘調査により、縄文時代の土坑・竈穴、古墳時代後期の住居跡、中・近世の地下式坑などが検出されている。

本遺跡は、今回の溝跡の発見により、初めて登録された遺跡であるが、遺跡の時代や性格については不明であると言ってもよい。今後の調査により解明されることを期待したい。

第1表 志木市の時代別にもた考古資料一覧

1. 旧石器時代

No.	遺跡名	地名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引
7	西原大塚	区画整理 市史掲載	石器集中地点 4カ所(記述のみ) ナイフ型石器、尖頭器など	No.19 1984『志木市史 原始・古代資料編』

2. 縄文時代

No.	遺跡名	地名	掲載された主な遺構・遺物	時期	報告書一覧No.及び資料索引
2	中野	第2地点	土坑 1基、土製四盤 2点、包含層出土石器片	中期	No.2
		第16地点	集石 1基	不明	No.17
		第43地点	包含層出土石器	早～後期	No.20
3	城山	第3地点	包含層出土石器	早～後期	No.7
		第4地点	埋甕 1基	中期	No.8
		第9地点	土坑 1基	不明	No.11
		第12地点	包含層出土石器	早～晩期	No.17
		第11地点	土坑 2基	前・中期	No.12
		第29地点	土坑 1基、包含層出土石器片	早～後期	No.18
		第32地点	包含層出土石器	早～中期	No.18
		第34地点	包含層出土石器	早～中期	No.20
		第35地点	包含層出土石器	早～後期	No.20
		第2地点	住居跡 3軒、土坑 8基、集石 2基、土器、石器	中期	No.6
5	中道	第13地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	中期	No.13
		第21地点	包含層出土石器	前期	No.17
		第41地点	包含層出土石器	早～後期	No.20
		第1地点	住居跡 4軒、土坑 8基、土器、石器	中期	No.1
7	西原大塚	第3地点	住居跡 5軒、土坑 2基、土器	中期	No.2
		第8地点	住居跡 1軒、土坑 19基、土器、石器	中期	No.9
		第10地点	土坑 4基	中期	No.9
		第34地点	住居跡 3軒、土坑 6基、土器、石器	中期	No.18
		第36地点	遺構外出土石器片	前～後期	No.20
		区画整理	住居跡 16軒、埋甕 1基(記述のみ)	前・中期	No.19
		第1地点	住居跡 1軒、土坑 2基、包含層出土石器片	前・中期	No.3
8	新邸	第2地点	住居跡 1軒(第1地点と同一)、土器、石器、貝類	前期	No.4
		第3地点	包含層出土石器片	早・前期	No.10
		第4地点	土坑 1基	不明	No.13
10	田子山	第10地点	住居跡 1軒、土器	中期	No.17
		第32地点	土坑 1基、遺構外出土石器片	早～中期	No.16
		第37地点	遺構外出土石器片	早期	No.16
		第39地点	土坑 3基、集石 2基、炉穴 2基	早期	No.18
		第47地点	遺構外出土石器片	早・前期	No.20
		第49地点	遺構外出土石器片	早期	No.20

3. 弥生時代

No.	遺跡名	地名	掲載された主な遺構・遺物	時期	報告書一覧No.及び資料索引
2	中野	第2地点	住居跡 2軒、土器	後期	No.2
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.8
3	城山	第4地点	住居跡 2軒、土器	後期	No.8
		第35地点	住居跡 1軒、土器、磁石	後期	No.20
7	西原大塚	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.1
		第2地点	住居跡 3軒、土器	後期～古墳	誌未詳 塚・古墳群編
		第3地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.2
		第4地点	住居跡 3軒、土器、磁石	後期～古墳	No.4
		第6地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.8
		第7地点	小聖穴状遺構 1基	後期～古墳	No.10
		第8地点	住居跡 13軒、方形周溝墓 1基、竪立柱建築 1基	後期～古墳	No.9
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
		第10地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
		第14地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.17
		第21地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.17
		第32地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.16
		第36地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.20

7	西原大塚	区画整理	住居跡 106軒、方形周溝墓 3基(記述のみ)	後期～古墳	No.19
10	田子山	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.9
		第4地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.13
		第10地点	住居跡 5軒、土器	後期	No.17
		第31地点	住居跡 17軒(21号住居跡記述のみ)	後期	「田子山富士」文化財第22集
		第32地点	方形周溝墓 1基	後期～古墳	No.16
15	市場裏	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.17
		第2地点	方形周溝墓 1基、土器小片	後期～古墳	No.17
		第3地点	方形周溝墓 1基、土器小片	後期～古墳	No.14

4. 古墳時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	時期	報告書一巻No及び資料索引		
2	中野	第2地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.2		
		第7地点	住居跡 1軒	後期	No.10		
		第12地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.12		
		第16地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.17		
		第18地点	住居跡 1軒、土師器、鉄線多数	後期	No.14		
		第31地点	住居跡 1軒、土師器、鉄線、砥石	後期	No.15		
		第41地点	住居跡 1軒、土師器多数、土製品(紡錘車)	後期	No.18		
3	城山	市史掲載	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期	誌未収 図説・古墳群編		
		第1・2地点	住居跡 55軒、土師器多数、須恵器、鉄・土製品	前・後期	No.5		
		第3地点	住居跡 4軒、土師器	前・後期	No.7		
		第4地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.8		
		第6地点	住居跡 3軒、土坑 1基、土師器多数	後期	No.10		
		第7・9地点	住居跡 7軒、土師器多数、鉄製品	中・後期	No.11		
		第11地点	住居跡 3軒、土師器	前・後期	No.12		
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.17		
		第25地点	住居跡 2軒、土師器、初期須恵器	中・後期	No.16		
		第29地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後期	No.18		
		第34地点	住居跡 3軒、土師器	後期	No.20		
		第35地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.20		
		5	中道	第2地点	住居跡 5軒、土師器	後期	No.6
				第12地点	住居跡 3軒、土師器	後期	No.13
				第13地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.13
				第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、土師器、鉄製品(露完形1点)	後期	No.17
				第33地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後期	No.16
第36地点	住居跡 1軒、土師器			前期	No.18		
第37地点	住居跡 1軒、土師器多数、須恵器小片、土製品			中期	No.18		
7	西原大塚	市史掲載	土師器	前期	誌未収 図説・古墳群編		
		第11地点	方形周溝墓 1基、壺棺 1基、土師器	前期	No.11		
8	新邸	第2地点	住居跡 1軒、土師器	前期	No.4		
10	田子山	第5地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、炭化種子(ヤマモモ多数)	後期	No.13		
		第13地点	住居跡 1軒、土師器(陶文土器1点あり)	後期	No.17		
		第29地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期	No.15		
		第48地点	住居跡 1軒、土師器(総比企型環あり)	後期	No.20		
11	富士前	市史掲載	土師器多数	前期	誌未収 図説・古墳群編		
		第15地点	住居跡 1軒、土師器(元屋敷系高坏あり)	前期	No.20		
12	馬場	市史掲載	土師器(S字彎か)	前期	誌未収 図説・古墳群編		

5. 奈良～平安時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	時期	報告書一巻No及び資料索引
2	中野	第2地点	住居跡 1軒、須恵器	8c後半	No.2
		第16地点	住居跡 3軒、須恵器	9c中葉	No.17
		第41地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品、乾用紡錘車	9c後半	No.18
3	城山	第43地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄滓	9c前半	No.20
		第1・2地点	住居跡 6軒、灰釉陶器、土師須恵器多数、鉄・石製品	8～10c	No.5
		第4地点	土坑 2基、灰釉陶器、須恵器(新開・栗谷ヶ窪か)	10c前半	No.8
		第7地点	住居跡 1軒、灰釉陶器	9cか?	No.11
		第11地点	住居跡 1軒	平安時代	No.12
		第29地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
第35地点	住居跡 2軒、銅印、布目瓦、緑釉陶器片	9c後半	No.20		

5	中 道	第12地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9 c 後半	No.13
		第21地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器、土師・須恵器	9 c 後半	No.17
		第41地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器、須恵器、炭化米	9～10 c	No.20
7	西原大塚	第8地点	住居跡 3軒、	平安時代	No.9
		第34地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
10	田子山	第4地点	住居跡 9軒、土師・須恵器	8～10 c	No.13
		第5地点	住居跡 4軒、土師・須恵器	9～10 c	No.13
		第6地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、刀子、土甕	9 c 後半	No.12
		第7地点	住居跡 1軒、布目瓦小片2点、格子目押瓦小片1点	8 c 後半	No.12
		第29地点	住居跡 1軒、須恵器、布目瓦1点	9～10 c	No.15
		第37地点	土坑か 2基、須恵器	9～10 c	No.16
		第39地点	溝跡 3本、土師・須恵器小片	9 c 代	No.18
		第41・42地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄・銅製品	9～10 c	No.18
		第47地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・銅製品	9 c 中頃か	No.20
第49地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	10 c 代	No.20		

6. 中・近世

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	時期	報告書一覧No.及び資料索引
2	中 野	第2地点	溝跡 1本	不明	No.2
		第6地点	溝跡 1本	不明	No.8
		第8地点	土坑 1基	不明	No.10
		第11地点	土坑 1基、陶・磁器小片	18～19 c	No.17
		第43地点	井戸跡 1基	不明	No.20
3	城 山	市史掲載	柏城跡の大堀跡 1本、陶・磁器	中・近世	『志木市史 中世資料編』
		第1・2地点	柏城跡関連の副跡 5本、土坑 32基、井戸跡 10基 竪立住建築、ビッド群、陶・磁器多数、銅鏡、鉄・石製品	中・近世	No.5
		第3地点	土坑 16基、溝跡 2本	中・近世	No.7
		第4地点	土坑 1基	14～15 c	No.8
		第6地点	土坑 7基	中・近世	No.10
		第7・9地点	土坑 3基、土製品	中・近世	No.11
		第11地点	土坑 3基、井戸跡 1基、陶・磁器、板碑、馬備	中・近世	No.12
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶・磁器、古銭	中・近世	No.17
		第25地点	土坑 2基	中・近世	No.16
		第29地点	土坑 11基、溝跡 1本、ビッド群、 板碑、陶・磁器、馬骨、古銭など	中・近世	No.18
第35地点	土坑 15基(竪立土坑1基・浴解炉1基・地下式坑1基) 井戸跡 1基、ビッド群、扁型、土製品、鉄製品、古銭など	中・近世	No.20		
5	中 道	第2地点	土坑 数基、溝跡 14本、製住建築 4棟、ビッド群	中・近世	No.6
		第6地点	土坑 1基、陶・磁器小片	15 c 代	No.12
		第26地点	土坑 6基(土坑墓2基) 竪立住建築、人骨、古銭など	17 c 代	No.17
		第36地点	溝跡 2本、ビッド群、陶・磁器小片	中・近世	No.18
		第37地点	土坑墓 1基、道路状遺構 1条、人骨、青磁器、古銭	中 世	No.18
8	新 郷	第1地点	土坑 19基(地下式坑1基)、井戸跡 1基、溝跡 2基	中・近世	No.3
		第3地点	地下式坑 1基、溝跡 2本、陶・磁器	中・近世	No.10

7. 近代以降

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	時期	報告書一覧No.及び資料索引
2	中 野	第11地点	土坑 1基	18～19 c	No.17
3	城 山	第35地点	かわらけ 2点	19 c 代	No.20
10	田子山	第31地点	ローム探掘遺構 2カ所	19 c 後半	『田子山富士』文化財第22集
		第49地点	土坑 1基	近・現代	No.20
15	市場裏	第3地点	かわらけ 2点	19 c 代	No.14

第2表 志木市の発掘調査報告書一覧

No.	報 告 書 名	刊行年	シリーズ名	発 刊 者	執 筆者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	谷井彪・宮野和明 井上誠夫
2	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊 尾形剛敏
3	新塚遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
4	新塚遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形 阿山謙吉
6	中道遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
7	城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書	1987	志木市の文化財 第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ローテリクラブ	佐々木
8	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財 第13集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
9	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財 第14集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
10	西原大塚遺跡第7地点 新塚遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書	1991	志木市の文化財 第15集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
11	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財 第16集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
12	志木市遺跡群Ⅳ	1992	志木市の文化財 第17集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
13	中野遺跡第12地点 中野遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書	1992	志木市の文化財 第18集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
14	志木市遺跡群Ⅴ	1993	志木市の文化財 第20集	志木市教育委員会	尾形
15	志木市遺跡群Ⅵ	1995	志木市の文化財 第21集	志木市教育委員会	尾形
16	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財 第23集	志木市教育委員会	佐々木・尾形 藤井孝子
17	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書	1996	志木市の文化財 第24集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
18	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財 第25集	志木市教育委員会	佐々木・尾形 深井
19	西原大塚の遺跡 西原特定土地地区再整理事業に伴う発掘調査概報	1998		志木市遺跡調査会 西原特定土地地区再整理組合	佐々木
20	志木市遺跡群Ⅸ	1999	志木市の文化財 第27集	志木市教育委員会	尾形・深井

第2章 田子山遺跡第19地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

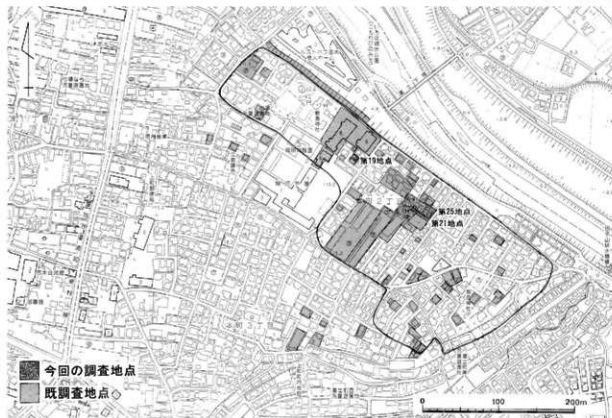
平成4年6月、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市本町2丁目1698-21番地（面積63.54㎡）内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田子山遺跡（コードF11228-010）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 隣接する田子山遺跡第1地点では、発掘調査を実施し、埋蔵文化財が確認されたことから、当該開発予定地からも埋蔵文化財が存在する可能性があること。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

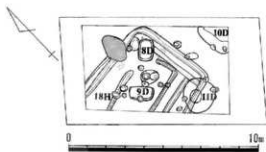
平成4年6月22日、教育委員会は、開発者より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、6月29日、午前10時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸中央に1本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認



第2図 周辺の地形と調査地点（1/5000）

平成11年12月31日現在



第3図 遺構分布図(1/200)

作業を行った。その結果、カマドを有する住居跡と思われる遺構1基を確認した。

そのため、教育委員会は、この結果を開発者に報告し、再度協議をしたところ、埋蔵文化財の保存措置として、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、開発者により、埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会で発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会(以下、遺跡調査会)を幹旋した。遺

跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、7月6日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第5の1139号 平成4年12月18日付である。

(2) 発掘調査の経過

人員導入による発掘調査は、平成4年7月6日から開始した。すでに、6月29日の確認調査の際に、調査区域全面の表土剥ぎが終了し、残土はすべて調査区域外に搬出していたため、まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った後、住居跡(18H)の精査を開始した。しかし、狭小な面積であるため、残土置場が十分確保できなかったため、翌7日にはもう一度残土搬出作業を行う予定をとることにした。

7日、残土搬出作業に併行し、18Hの精査を行う。18Hについては、出土土器から平安時代のものであることが判明した。また、18Hを切る2基の土坑(8・9D)が検出されたため、すぐに8・9Dの精査を行う。遺物は検出されなかったが、覆土から近世以降のものである可能性がある。

8日、調査区北東端から、土坑(10D)を確認したため、精査を開始した。掘り終了後、写真撮影を行う。時期については、暗茶褐色の覆土と条痕文系土器を1点出土したことから、縄文時代早期末葉の所産のものと判明した。18Hは、硬化した床面を確認し、壁溝を掘り始める。また、床面は2・3回の貼り替えが行われており、硬化面が重なるように確認された。おそらく、数回の拡張あるいは建て替えが行われたものと考えられる。

10日には、第1回目の調査区全体の写真撮影を行う。午後からは、18Hの平板測量とカマドの精査・10Dの実測を開始する。

13日、18Hの平板測量が終了後、貼床の精査を開始する。その結果、貼床下から新たにカマドの残存部分と思われる粘土検出範囲と硬化した床面・壁溝をもつ住居跡Bが検出された。さらに精査を進めると、住居跡Bに切れ、住居跡Cが検出された。住居跡Cは床面上から炭化材が多く出土していることから、焼失住居と考えられる。

15日、第2回目の調査区全体の写真撮影を行う。その後、18Hの住居跡B・Cの平板測量を開始し、カマドの実測を完了した。

16日、18Hのすべての実測を終了する。また、18Hに切られる土坑(11D)の精査を開始し、掘り終了後、写真撮影を行い、その後実測を完了した。

17日、21日に埋め戻し作業を実施し、完了した。

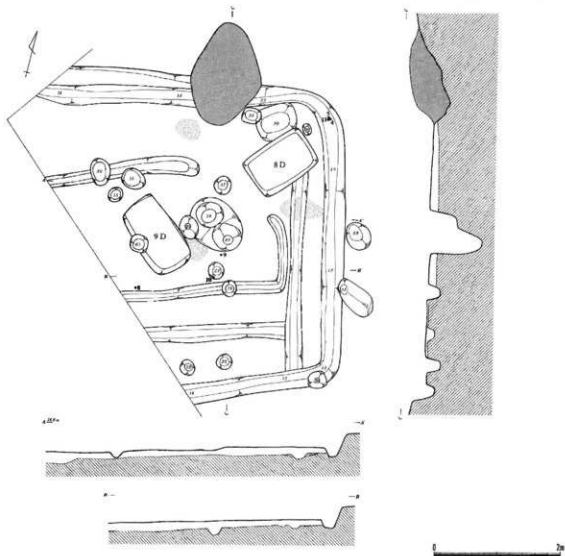
第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

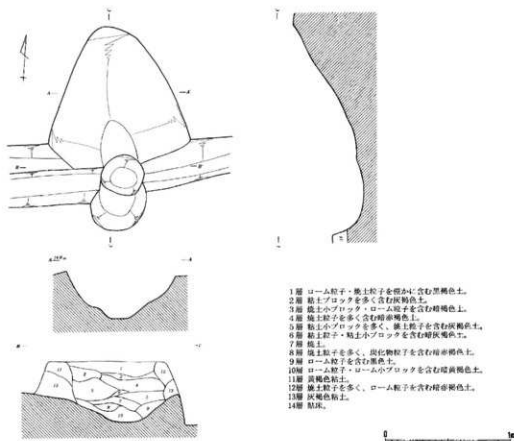
18号住居跡 (第4・5図)

〔住居構造〕 8・9号土坑に切れ、11号土坑を切る。西半部は調査区域外にあるものと思われる。また、本遺構は当初1軒として調査を行っていたが、床面精査時に硬化面が数枚重なるように確認されたことや新たに壁溝・カマドの残存部と考えられる燃焼痕が検出されたことから、数回の建替えあるいは拡張がなされた可能性がある。以下、新しいと思われる順から住居跡A→B→Cとして説明するが、基本的に住居跡B・Cについては、壁溝の配置がうまく合わないことから、詳細は不明であると言わざるを得ない。

〔住居跡A〕 最新の住居跡として北側にカマドをもつ住居跡が完成したものと理解できる。(平面形) 長方形であろう。(規模) 不明×5.34m。(壁高) 19~25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅25cm・下幅15cm前後・深さ12~23cmを測る。(床面) カマド前面を中



第4図 18号住居跡 (1/60)



第5図 18号住居跡カマド(1/30)

心によく硬化した床面を確認した。(カマド)北壁の中央よりやや東に位置する。長さ165cm・幅114cm・壁への掘り込み94cmを測る。大部分は崩壊し、天井部などの粘土は住居内へ覆土として流れ込んでいるものと思われるが、両袖部に使用された灰褐色粘土は部分的に残存している。(覆土)焼土・粘土小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

〈住居跡B〉住居跡Aの東壁に沿って一回り内側から壁溝が確認され、またカマドの残存部と考えられる燃焼痕が検出されている。

〈住居跡C〉一番内側にまわる壁溝が本遺構に関係するものであろうか。また、中央付近に炉跡であるかは不明であるが、焼土範囲を確認した。

[遺物]住居跡Aの貼床下の住居跡Cの床面上から土器が比較的多く出土した。

[時期]平安時代。住居跡Aは10世紀前半。住居跡Cは9世紀後半か。

[所見]住居跡Aの貼床下の住居跡Cの床面上からは炭化材が多く出土していることから、焼失住居と考えられる。

18号住居跡出土遺物(第6図)

須恵器杯・埴形土器(1~8、10~13)

1は器高5.0cm、口径13.4cm、底径5.0cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。住居跡Aの床面上からの出土で、遺存度は1/3程である。

2は器高5.4cm、口径14.6cm、底径5.4cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調

は黄白色を呈し、胎土には砂粒を含む。住居跡Aの床面上からの出土で、遺存度は1/2程である。

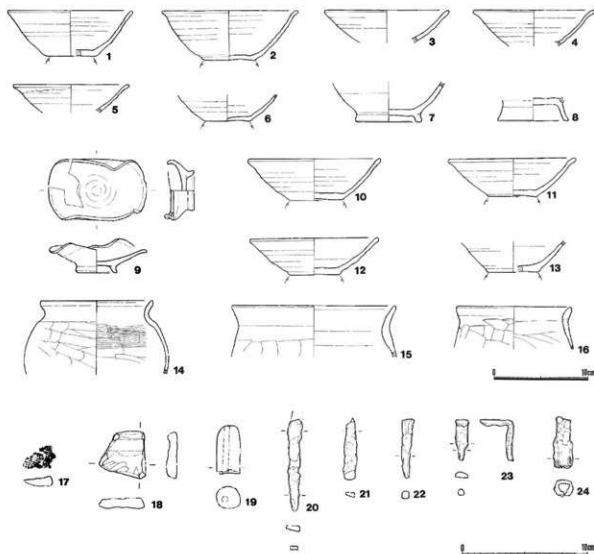
3は現器高3.6cm、口径13.4cm。ロクロ回転は右回転。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。住居跡Aの覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/2程遺存する。

4は現器高4.0cm、推定口径13.0cm。ロクロ回転は右回転。色調は薄茶色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色微粒子を含む。住居跡Aの北東コーナーの覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/4程遺存する。

5は現器高3.1cm、推定口径12.4cm。ロクロ回転は右回転。口縁部直下に粘土巻上げ痕が残る。色調は灰茶褐色を呈し、胎土には砂粒・白色微粒子・小石を含む。住居跡Aの北東コーナーの覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/4程遺存する。

6は現器高2.9cm、底径4.9cm。ロクロ回転は右回転。色調は灰褐色を基調とし、胎土には砂粒・白色微粒子・小石を含む。住居跡Aのカマド内からの出土で、体部から底部にかけて1/4程遺存する。

7は現器高4.3cm、底径7.2cm。高台付碗である。ロクロ回転は右回転。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色微粒子・小石を含む。住居跡Aの覆土中からの出土で、体部から底部にかけて1/2程遺存する。



第6図 18号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

8は現器高2.5cm、底径7.6cm。高台付壺であろうか。ロクロ回転は右回転。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色微粒子・小石を含む。住居跡Cの床面上からの出土で、底部のみ完形である。

10は器高4.5cm、口径14.2cm、底径5.6cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色微粒子・小石を含む。ピット内からの出土で、遺存度は4/5程である。

11は器高4.1cm、口径13.7cm、底径5.2cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色微粒子・小石を含む。住居跡Aの北東コーナーの覆土中からの出土で、遺存度は2/3程遺存する。

12は器高4.0cm、推定口径14.0cm、推定底径5.4cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色微粒子・金雲母・小石を含む。住居跡Aのカマド内からの出土で、遺存度は1/3程遺存する。

13は器高3.4cm、底径5.4cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕を残す。色調は明褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色微粒子・金雲母を僅かに含む。住居跡Aの覆土中からの出土で、体部から底部にかけて1/3程遺存する。

須恵器耳皿(9)

現器高3.7cm、底径4.4cm、口径は長径10.5cm、短径6.3cm。ロクロ回転は右回転。口縁部は面取り成形が施されており、側面からみると「へ」字状を呈している。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色微粒子を含む。住居跡Cの床面上からの出土で、遺存度は4/5程である。

土師器壘形土器(14~16)

14は現器高7.9cm、推定口径12.0cm。口縁部が短く外反し、胴部上半に膨らみをもつ土器である。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はハケ状工具によるナデが施され、外面は斜方向にヘラ削り調整が施される。色調は薄茶色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色・白色粒子を含む。住居跡Cの覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

15は現器高5.5cm、推定口径17.6cm。口縁部は「く」字状を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向にヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色・白色粒子を多く含む。住居跡Aの覆土中からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

16は現器高4.6cm、推定口径12.4cm。口縁部は「く」字状を呈する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横方向にヘラ削り調整が施される。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母を含む。住居跡Aのカマド内からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

布目瓦(17)

布目瓦の小破片である。下面は剥落している。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子を僅かに含む。住居跡Aの床面上からの出土である。

土製品(18・19)

18は須恵質のもので、土器の口縁部と思われたが、周縁にすべて面取りが施されていることから、用途不明品として取り扱った。また、表面には幅8mmの断面皿状の凹みがあることから、玉類などの製作に関係する砥石である可能性もある。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒・茶褐色粒子を含む。重さは13.6g。住居跡Aの覆土中からの出土である。

19は土錘である。現全長3.9cm、直径1.9cm、重さ15.4g、穿孔径4mm。円筒形を呈する管状のもので、

半分程欠損しているものと思われる。住居跡Aの覆土中からの出土である。

鉄製品 (20~24)

すべて18号住居跡内からの出土で、位置は特定できなかった。

20~22は刀子の破片と思われる。20・22は断面が長方形に近いことから、茎部に相当するものであろう。21は断面の片面が尖っていることから、刃部に相当するものと思われる。

23は「L」字状を呈するが、折れ曲がったものであろう。断面が長方形を呈し、鍔被部(のかつぎぶ)が見られることから、鉄鑿であるかもしれない。

24は袋状を呈する円筒形のもので、用途不明品である。現全長4.2cm、最大直径1.6cm、厚さ2mm、重さ12.8g。

(2) 土坑

8号土坑 (第4図)

〔構造〕18号住居跡を切る。(平面形)長方形。(規模)108×75cm。(長軸方位)N-46°-E。(深さ)30cm前後。(覆土)ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕不明。

9号土坑 (第4図)

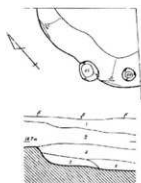
〔構造〕18号住居跡を切る。(平面形)長方形。(規模)126×84cm。(長軸方位)N-48°-W。(深さ)40cm前後。(覆土)ローム粒子を多く含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕不明。

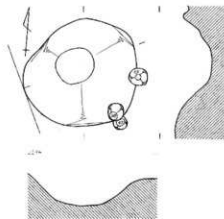
10号土坑 (第7図)

〔構造〕調査区北東端から検出され、大部分が調査区域外にあるものと思われ、詳細不明である。(平面形)楕円形か。(深さ)36cm。(覆土)ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。



10号土坑

- 1層 礫土。
- 2層 表土。
- 3層 ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 4層 ローム粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。



11号土坑



第7図 10・11号土坑 (1/60)

[遺物] 覆土中から条痕文系土器の小破片が1点出土した。

[時期] 縄文時代早期後葉。

10号土坑出土遺物 (第8図1)

条痕文系土器の口縁部付近の小破片である。文様は条痕を地に隆帯が1本施されている。色調は表面が暗黄褐色を呈するが、断面を観察するとサンドイッチ状に内部は黒色を呈する。胎土中には繊維の他砂粒を僅かに含む。

11号土坑 (第7図)

[構造] 18号住居跡に切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 184×170cm。(深さ) 55cm前後。(覆土) 炭化物粒子を多く、ローム粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 覆土から観察して、縄文時代と思われる。

(3) 遺構外出土遺物 (第8図2~11)

縄文時代から弥生時代にかけての土器が検出されている。時期的には、縄文時代早・中・後期、弥生時代後期に比定され、第1~5群土器に分類された。

第1群土器 縄文時代早期後葉の条痕文系土器 (2・3)

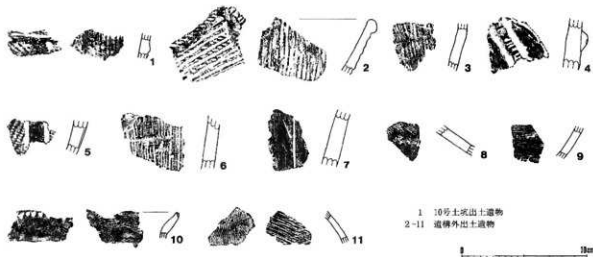
2は波状口縁を呈する口縁部小破片である。内外面及び口唇上には条痕が施される。外面には隆帯と沈線により文様が描かれている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土中には繊維・砂粒・小石を含む。3の外面には縦方向に条痕が施される。色調は暗赤褐色を呈し、胎土中には繊維を多く、砂粒を含む。

第2群土器 縄文時代中期中葉の勝坂式土器 (4)

半截竹管による押引文が付加された隆帯をもつ土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には暗黄褐色粒子・砂粒を含む。

第3群土器 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器 (5・6)

いずれも胴部小破片である。5はRLの単節斜縄文を地文に磨消懸垂文が描かれる。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には暗黄褐色粒子を含む。6は地文の条線が縦方向に施される。色調は黒茶褐色を呈し、



第8図 10号土坑・遺構外出土遺物 (1/3)

胎土中には暗黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。

第4群土器 縄文時代後期前葉の堀之内式土器(7)

1本の垂下する沈線が描かれる土器である。表面は全面縦方向にヘラ磨きが施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土中には暗黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。

第5群土器 弥生時代後期の土器(8~11)

8・9は壺形土器である。8は肩部小破片で、文様として端末結節を伴うRLの単節斜縄文が施され、その下方の無文部は赤彩されている。色調は淡黄褐色を呈し、胎土中には茶褐色粒子・砂粒を含む。9はハケ目調整後粗いヘラ磨きが施される土器で、色調は暗黄褐色を呈し、胎土中には茶褐色粒子・砂粒を含む。

10・11は甕形土器である。10は口縁部小破片で、口唇部外面には押捺が加えられている。色調は全体的に黒色を呈しているが、所々に赤く塗料の付着したような痕跡が観察される。胎土中には砂粒・小石を含む。11は内外面ハケ目調整が施される土器で、色調は暗茶褐色～黒褐色を呈している。胎土は精錬され、砂粒を僅かに含む。

[参考文献]

- 佐々木保俊 1990「第3章 田子山遺跡第1地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集 志木市教育委員会
1992「第4章 田子山遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集 志木市教育委員会
1992「第5章 田子山遺跡第7地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集 志木市教育委員会
1992「第4章 田子山遺跡第4地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
1992「第5章 田子山遺跡第4地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
1996「第8章 田子山遺跡第10地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏 1996「第3章 田子山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集 志木市教育委員会
1996「補説 田子山遺跡第31地点の調査」『田子山富士』志木市の文化財第22集 志木市教育委員会
1996「第10章 田子山遺跡第13地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 尾形則敏・深井忠子 1996「第5章 田子山遺跡第32地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
1996「第6章 田子山遺跡第37地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
1997「第4章 田子山遺跡第39地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
1999「第4章 田子山遺跡第47地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
1999「第5章 田子山遺跡第48地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
- 深井忠子 1997「第5章 田子山遺跡第41・42地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
1999「第6章 田子山遺跡第49地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会

第3章 田子山遺跡第21地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

平成4年7月21日、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市木町2丁目1690-4番地（面積104.20㎡）内に道路造成工事を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田子山遺跡（コード11228-010）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

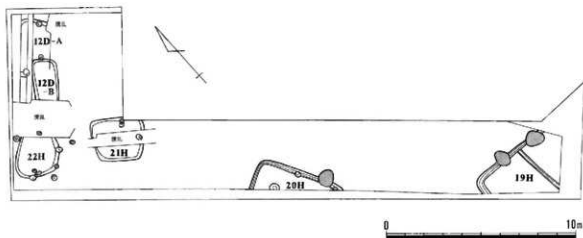
1. 隣接する田子山遺跡第4・5地点では、発掘調査を実施し、埋蔵文化財が確認されていることから、当該開発予定地からも埋蔵文化財が存在する可能性があること。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成4年7月22日、教育委員会は、開発者より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、9月7日、午前9時15分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸中央に1本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、平安時代の住居跡と思われる遺構5基と数本のピットを確認した。

そのため、教育委員会は、この結果を開発者に報告し、再度協議をしたところ、埋蔵文化財の保存措置として、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、開発者により、埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに



第9図 遺構分布図（1/200）

埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、9月8日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第5の1527号 平成5年3月23日付である。

(2) 発掘調査の経過

人員導入による発掘調査は、平成4年9月8日から開始した。すでに、7日の確認調査の際に、調査区域全面の表土剥ぎが終了していたため、午前中は調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。午後からは、調査区東端の住居跡(19H)と調査区中央の住居跡(20H)の精査を開始した。特に、19Hについては、カマドが北壁から2カ所とさらに壁溝が中央付近で1本確認されたことから、住居の建て替えが行われたものと考えられる。19・20Hの時期は、出土遺物から平安時代のものと判明した。

9日、新たに調査区西端の小竪穴状遺構(21H)の精査を開始する。19・20Hについては、午前中に写真撮影を行い、午後からは平板測量を開始し、終了する。

10日、19Hのカマドの実測を開始する。また、新たに調査区西端の土坑(12D-A)の精査を開始する。21H、12D-Aは出土遺物から平安時代のものと判明した。

11日、21Hの写真撮影を終了する。また、南側を掘乱に破壊されているが、12D-Aを切る土坑(12D-B)の精査を開始する。12D-Bは出土遺物から、近世以降のものと判明した。

18日、20Hのカマドの実測を開始し、終了する。また、新たに調査区西端の住居跡(22H)の精査を開始する。22Hについても出土遺物から平安時代のものと判明した。

21日、12D-A、22Hの写真撮影を行い、その後実測を完了、すべての調査を終了する。

28日、埋め戻し作業を完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

19号住居跡(第10図)

〔住居構造〕北壁と北西コーナー以外は調査区域外にあるものと思われる。(平面形)方形か。(壁高)5~11cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では全周する。上幅20~30cm・下幅10~16cm・深さ8~15cmを測る。間仕切り状の壁溝は、上幅16~24cm・下幅8~12cm・深さ5~9cmを測る。(床面)床面は全体的に硬化している。また、カマドAの前面の床面から粘土が検出された。(カマド)北壁に2基確認された。〈カマドA〉北壁の東側に偏って位置する。主軸方位はN-3°-E。長さ94cm・幅95cm・壁への掘り込み34cmを測る。両袖部は粘土のみで構築されており、ロームによる隆起部分は見られなかった。燃焼部は床面より20cm程掘り込まれている。また、支脚が燃焼部の左奥より直立した状態で検出された。煙道部は60°程の勾配で立ち上がっている。〈カマドB〉北壁の西側に偏って位置する。残りが良くないことから、旧カマドと思われる。主軸方位はN-S。長さ95cm・幅70cm・壁への掘り込み50cmを測る。燃焼部は30cm程の掘り込みをもち、煙道は30°程の勾配で緩やかに立ち上がる。(柱穴)検出されなかった。(覆土)焼土粒子を含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕床面上及びカマド内から土器が出土した。

〔時期〕平安時代(9世紀後半)。

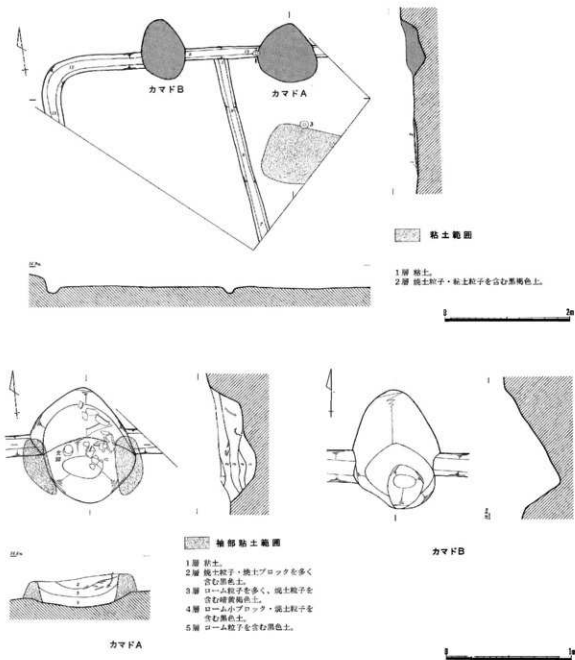
[所見] 本住居跡は、北壁にカマドが2基と住居を東西に二分するように間仕切り状の壁溝が確認されたことから、住居の建て替えが行われた可能性がある。また、床面上から焼土と炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と考えられる。

19号住居跡出土遺物 (第13図 1~6、第14図18)

須恵器坏形土器 (1~3)

1は器高4.1cm、口径11.8cm、底径5.7cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕が残るが、その上に線刻ではないが、暗文風に何らかの印が付されている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色針状物質を含む。カマドAの右横からの出土で、遺存度は3/4程である。

2は器高4.1cm、口径12.5cm、底径5.3cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕が残るが、そ



第10図 19号住居跡・カマド (1/60・1/30)

の上に線刻ではないが、暗文風に十文字状の印が付されている。色調は灰褐色～薄茶色を呈し、胎土には砂粒・白色針状物質・茶褐色粒子を含む。カマドA内からの出土で、遺存度は2/3程である。

3は器高4.6cm、口径12.2cm、底径5.6cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕が残る。また、口縁部直下には粘土巻上げ痕が顕著に残る。色調は灰褐色～薄茶色を呈し、胎土には白色針状物質・小石を多く含む。カマドA前面のほぼ床面上からの出土で、遺存度は4/5程である。

土器器壘形土器（4・5）

4は現器高20.9cm、推定口径23.6cm。胴部上半に最大径をもち、口縁部は外反する。外面口縁部直下には沈線状の凹みがある。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り調整が施される。カマドA内からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて、1/3程遺存する。

5は現器高19.7cm、推定口径17.8cm。胴部上半に最大径をもち、頸部から口縁部にかけては「コ」の字状を呈する。色調は暗茶褐色～黒色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子・黄褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り調整が施される。カマドA内からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて、1/4程遺存する。

土製品（6）

土製支脚である。現全長13.0cm、最大幅9.7cm。円筒形を呈し、表面には縦方向に稜線がみられる。カマドAの燃焼部から直立した状態で出土した。

鉄製品（18）

釘であろう。長さ6.6cm、最大幅1.0cm、重さ7.3g。断面形は長方形である。完形品である。

20号住居跡（第11図）

〔住居構造〕北東壁と北コーナー付近以外の大部分は調査区域外にあるものと思われる。（平面形）方形か。（規模）不明×4.70m。（壁高）15～27cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できる範囲では全周する。上幅17～30cm・下幅10～20cm・深さ2～13cmを測る。（床面）壁際を除いて硬化している。（カマド）北東壁の東コーナーに偏って位置する。主軸方位はN-70°-E。長さ93cm・幅80cm・壁への掘り込み60cmを測る。燃焼部は床面より5cm程掘り込まれており、煙道部は30°程の勾配で緩やかに立ち上がっている。遺存状態はあまり良くなく、粘土部分はほとんど見当たらない。（柱穴）北コーナーに主柱穴と思われるものが1本確認された。深さは56cmを測る。（覆土）ローム粒子・炭化物粒子を含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕床面上及び覆土中から、土器・鉄製品・石製紡錘車が出土した。

〔時期〕平安時代（9世紀前半）。

20号住居跡出土遺物（第13図7～12、第14図19・20）

須恵器杯形土器（7・8）

7は器高4.2cm、口径13.4cm、底径7.0cm。ロクロ回転は右回転。底部には回転糸切り痕が残るが、その上に線刻で、十文字状の印が付されている。また、内外面に細長く火タスキ状の痕跡が顕著に残る。色調は暗褐色～黄褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母・小石を含む。北壁近くの床面上10cm程浮いた覆土中からの出土で、完形品である。

8は器高3.4cm、推定口径13.4cm、底径8.0cm。ロクロ回転は右回転。底部は回転糸切り後、周辺ヘラ

削り調整が施される。色調は灰白色を呈し、胎土には砂粒・白色微粒子を僅かに含む。覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

須恵器壺形土器 (9)

器高6.2cm、底径6.2cm。ロクロ回転は右回転。体部下半は回転へら削り調整が施される。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。北壁近くの床面上10cm程浮いた覆土中からの出土で、体部下半から底部にかけて、1/2程遺存する。

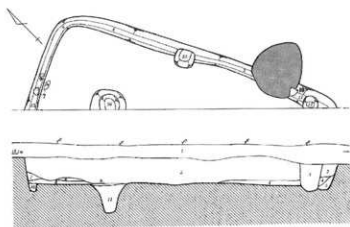
須恵器壺形土器 (10~12)

10は頸部破片である。文様の一部と思われるが、2条の沈線と2段の波状文が観察できる。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を多く含む。カマド右横からの出土である。

11・12は胴部破片である。11は外面に平行叩き（格子目状）、内面に同心円当て具痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。12は外面に平行叩き、内面に同心円当て具痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。11・12は覆土中からの出土である。

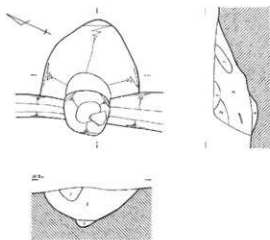
鉄製品 (19)

リング状の製品である。刀子などの柄部分を固定させる**はばき**と呼ばれる金具であろう。長径2.0cm、短径0.7cm、高さ0.4cm、厚さ1mm、重さ0.5g。カマド内からの出土である。



- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子・炭化物粒子を含む黒色土。
- 3層 粘土粒子・焼土ブロックを多く含む炭化物粒子を含む赤褐色土。
- 4層 ローム粒子を多く含む炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子を多く含む炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 6層 焼土ブロックを多く含む炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 7層 粘土ブロック。
- 8層 焼土ブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 9層 焼土ブロック。
- 10層 ローム粒子を含む暗褐色土。
- 11層 ロームブロックを含む暗褐色土。

0 2m



- 1層 粘土を多く含む、焼土小ブロックを含む暗褐色土。
- 2層 炭化物・炭化物粒子を含む黒色土。
- 3層 ローム粒子を多く含む、炭化物粒子を含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子を多く含む暗褐色土。
- 5層 ローム粒子を多く含む暗褐色土。

0 2m

第11図 20号住居跡・カマド (1/60・1/30)

石製品 (20)

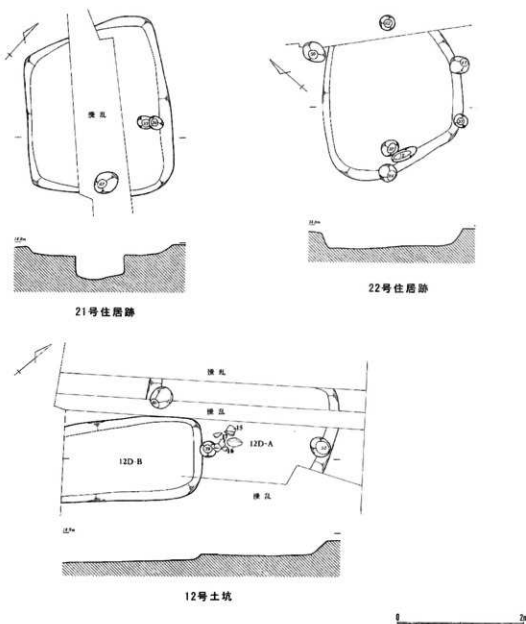
蛇紋岩製の紡錘車である。形状は厚台形を呈する。表面はていねいに磨かれており、美しい光沢をもつ。上底径2.9cm、下底径3.9cm、高さ1.7cm。遺存度は1/2程である。

21号住居跡 (第12図)

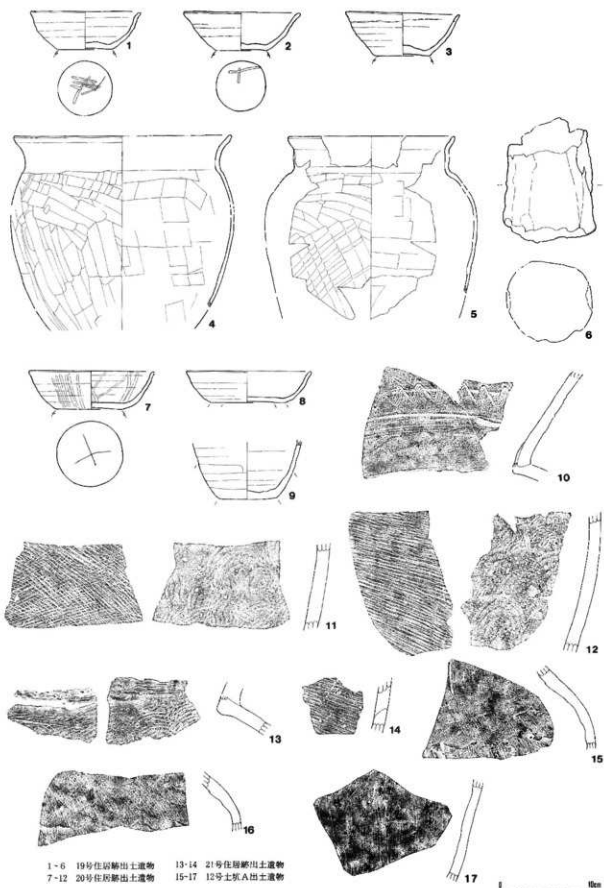
〔住居構造〕 小竪穴状遺構と考えられる。ここでは住居跡として扱った。長軸中央部は攪乱により壊されている。(平面形) 台形状。(規模) 2.90×2.30m。(壁高) 8~18cmを測り、比較的緩やかに立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬化した床面を確認した。(覆土) 部分的に粘土を含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕 床面上及び覆土中から僅かに土器が出土した。

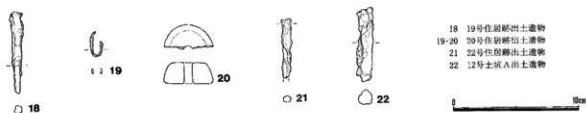
〔時期〕 平安時代。



第12図 21・22号住居跡・12号土坑 (1/60)



第13図 住居跡・土坑出土遺物1 (1/4)



第14図 住居跡・土坑出土遺物2(1/3)

21号住居跡出土遺物(第13図13・14)

13・14は須恵器甕形土器である。

13は胴部破片で、頸部との接合痕が残る。外面に網目状叩き、内面に同心円当てで具痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・黒色粒子・小石を含む。14は胴部破片である。外面に平行叩き、内面に同心円当てで具痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒・黒色粒子・小石を含む。いずれも覆土中からの出土である。

22号住居跡(第12図)

[住居構造] 小竪穴状遺構と考えられる。北東側は攪乱により壊されている。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×2.25m。(壁高) 7~27cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬化した床面を確認した。(覆土) ローム粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。南壁付近に粘土残存部分がみられた。

[遺物] 覆土中から僅かに土器が出土したが、図示できるものは鉄製品1点であった。

[時期] 平安時代。

22号住居跡出土遺物(第14図21)

鉄製品の釘であろうか。長さ4.8cm、最大幅0.9cm、重さ3.2g。断面形は丸に近い長方形である。

(2) 土坑

12号土坑(第12図)

12号土坑をA・B(12D-A・B)として、取り扱ったが、これらは時期の異なった遺構であった。

(12D-A) [構造] 12D-Aに切られ、攪乱にも壊されているため詳細は不明である。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×3.10m。(壁高) 18~23cmを測り、比較的緩やかに立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬化した床面を確認した。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 坑底上及び覆土中から、礫・須恵器・鉄製品・炭化種子(ヤマモモ)1点が出土した。

[時期] 平安時代。

[所見] 本遺構は土坑として扱ったが、21・22号住居跡と同類の小竪穴状遺構と考えられる。

(12D-B) [構造] 12D-Aを切る。(平面形) 長方形か。(規模) 不明×1.35m。(長軸方位) N-40° E。(深さ) 確認面からの深さは、40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) ローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 青磁碗・磁器皿の小破片が出土した。

[時期] 近世以降であろう。

12号土坑出土遺物（第13図15～17、第14図22、図版5-4）

第13図15～17、第14図22は12D-Aからの出土である。

15～17はすべて同一個体の須恵器壺形土器であろう。15・16は肩部、17は胴部破片である。色調は暗灰褐色を基調とするが、肩部付近の15には黄褐色の自然釉が付着している。胎土には砂粒・橙色粒子・小石を含む。内面はナデ、外面はハケ目調整が施される。すべて坑底上からの出土である。

22は用途不明の鉄製品である。現全長5.7cm、最大幅1.1cm、重さ21.8g。断面形は楕円形に近い。

図版5-4は12D-Bからの出土である。

1は肥前系の磁器皿の口縁部小破片である。時期は18世紀末～19世紀であろう。

2は中国製の青磁碗である可能性がある。色調は薄茶色を呈する。胎土は混入物を含まず、精練されている。

3は肥前系の磁器皿である。時期は19世紀以降であろう。

（3）遺構外出土遺物（第15図）

縄文時代から弥生時代にかけての土器が6点検出されている。時期的には、縄文時代早・中期、弥生時代後期に比定され、第1～4群土器に分類された。

第1群土器 縄文時代早期後葉の条痕文土器（1）

外面に条痕文が施される。色調は黒褐色を基調とし、胎土には砂粒・小石を多く、繊維を僅かに含む。

第2群土器 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器（2・3）

2は胴部破片である。文様はLの燃糸文を地文に沈線による懸垂文が描かれている。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

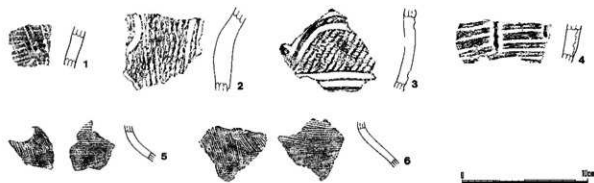
3は口縁部から胴部の境界付近の破片であろう。R.Lの単節斜縄文を地文に2本1単位の沈線により文様が描かれている。色調は内面が黒褐色、外面が暗茶褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。

第3群土器 縄文時代中期後葉の曾利式土器（4）

胴部破片である。文様は半截竹管による2本1単位の沈線文を地文に縦位の細隆起線文が貼付けられている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。

第4群土器 弥生時代後期の壺形土器（5・6）

5・6は頸部から胴部にかけての小破片で、同一個体であろう。外面及び内面頸部はハケ目調整、内面胴部はヘラナデが施される。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。



第15図 遺構外出土遺物（1/3）

第4章 田子山遺跡第25地点の調査

第1節 調査の経緯

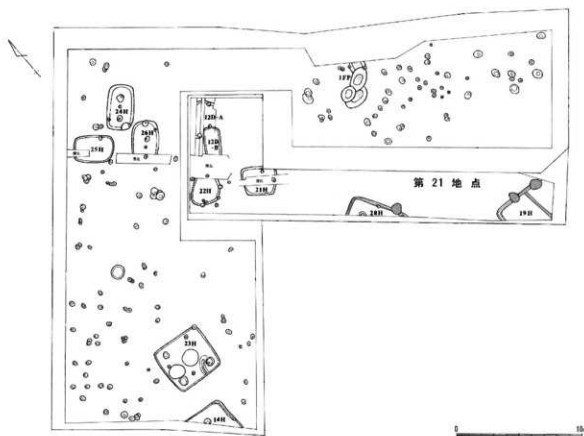
(1) 調査に至る経過

平成4年11月5日、株式会社住宅建設（代表取締役永嶋祥雄氏）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市本町2丁目1690-1番地（面積856.00㎡）内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田子山遺跡（コード11228-010）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 隣接する田子山遺跡第21地点では、発掘調査を実施し、埋蔵文化財が確認されたことから、当該開発予定地からも埋蔵文化財が存在する可能性があること。
2. 事前に埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成4年11月5日、教育委員会は、永嶋氏より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、平成5年1月22



第16図 遺構分布図（1/300）

日、午前9時15分から確認調査を実施した。

確認調査は、L字形の調査区に合わせ、直角に2本ずつ計4本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、住居跡と思われる遺構2基、ビット群と思われる遺構を多数確認した。

そのため、教育委員会は、この結果を永嶋氏に報告し、再度協議をしたところ、埋蔵文化財の保存措置として、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、永嶋氏により、埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。遺跡調査会ではこれを受け、永嶋氏と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、2月24日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第5の405号 平成5年6月24日付である。

（2）発掘調査の経過

発掘調査は、平成5年2月24日から開始した。先行して表土剥ぎ作業を24・25日にバックホー及びブルドーザーを使用して行った。残土置場は、今回の開発予定と関連がある既調査区である田子山遺跡第21地点を借用することができたため、一度に調査区域全面を対象とした調査が可能になった。その後、人員導入による発掘調査は、3月1日から開始した。まず、調査区東半部の整備と細部の遺構確認作業を行った後、炉穴（1FP）とビットの精査を行う。

3日、1FPを完掘する。掘り込みは全部で4カ所で、そのうち燃焼部と思われる焼土検出部分は3カ所で確認された。時期は条痕文系土器片が出土したことから、縄文時代早期後葉と考えられる。同日、調査区西半部の整備と細部の遺構確認作業を開始する。西半部では住居跡2軒（14・23H）とビット群が確認された。そのうち、14Hについては、過去に調査を行った第5地点の際に検出された平安時代の住居跡の延長部分と考えられるため、同一名を付けることにした。

4日、14Hと23Hの精査を開始する。

8日、14Hと23Hを完掘する。23Hについては、貯蔵穴やその周りの凸堤の存在から、古墳時代前期のものと考えていたが、出土土器の大部分が、平安時代のものであるため、平安時代の可能性がある。また、残りの調査区北端部の整備と細部の遺構確認作業を行った結果、第21地点でも検出されたものと同類の小竪穴状遺構を3基（24～26H）確認した。そして、それらの遺構は第16図の遺構分布図を参照してもわかるように、ほぼ1カ所に集中していることが判明した。

9日、24Hの精査を開始し、25・26Hについては、10日に精査を開始した。いずれも、出土遺物や覆土の観察から、平安時代のものであると考えられる。

12日には、ビット群・24～26Hを完掘した。

16日からは、遺構の写真撮影及び実測を開始する。同日には、14H・23～26Hの写真撮影を終了し、その後、14・23Hの実測を終了した。

17日、24～26Hの平板実測を終了し、ビット群は全測図に入れ、レベルを記入するに留めた。

19日には、すべての実測・写真撮影を終了、すべての調査を完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代

1号炉穴 (第17図)

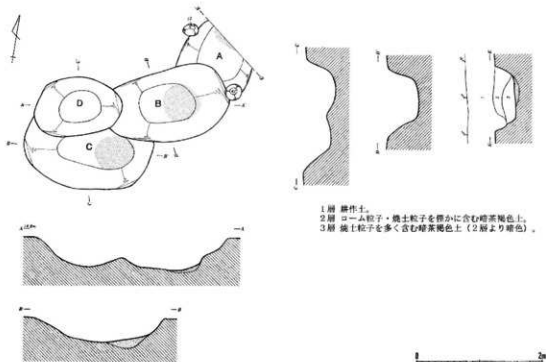
[構造] 4基の炉穴が重複しており、3か所の燃焼部分が確認されたが、各炉穴の新旧関係は把握できなかった。〈1号炉穴A〉北側は調査区域外にあるものと思われる。(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×1.20m。(長軸方位) N-63°-E。(深さ) 30cm前後を測る。炉床は厚さ8cm程が焼けて赤化している。(覆土) 上層はローム粒子・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層は焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。〈1号炉穴B〉(平面形) 楕円形。(規模) 2.00×1.15m。(長軸方位) N-63°-E。(深さ) 50cm前後を測る。炉床は厚さ6cm程が焼けて赤化している。(覆土) ローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。上層より焼土粒子を多く含んでいた。〈1号炉穴C〉(平面形) 楕円形か。(規模) 不明×2.10m。(長軸方位) E-W。(深さ) 40cm前後を測る。炉床は厚さ15cm程が焼けて赤化している。(覆土) ローム粒子・焼土粒子を多く含む暗赤褐色土を基調とする。〈1号炉穴D〉(平面形) 楕円形。(規模) 1.40×0.95m(長軸方位) N-75°-E。(深さ) 50cm前後を測る。燃焼部分は確認されなかった。(覆土) ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

[遺物] 条痕文系土器の小破片が数点出土した。

[時期] 縄文時代早期後葉。

1号炉穴出土遺物 (第22図1・2)

1・2ともに縄文時代早期後葉の条痕文系土器である。1は内面が黒色、外面が橙色を呈し、胎土に



第17図 1号炉穴 (1/60)

は繊維を僅かに含む。

2 は内面が暗茶褐色、外面が暗橙色を呈し、胎土には繊維・砂粒・小石を含む。

(2) 平安時代

14号住居跡 (第18図)

〔住居構造〕 田子山第5地点で確認された14号住居跡の北東コーナー部に相当するものと思われる。(平面形) 正方形か。(壁高) 10~13cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 北東コーナーから部分的に確認できた。上幅15~20cm・下幅7cm・深さ10cm前後を測る。(床面) 壁際を除いて硬化していた。(柱穴) 検出された1本は後世のものであろう。(覆土) ローム粒子を僅かに含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕 黒色土器の小破片が1点と数点の土師器・須恵器の小破片が出土した。

〔時期〕 平安時代。

〔所見〕 床面上から焼土及び炭化材が多く検出されていることより、焼失住居と考えられる。

14号住居跡出土遺物 (第21図1)

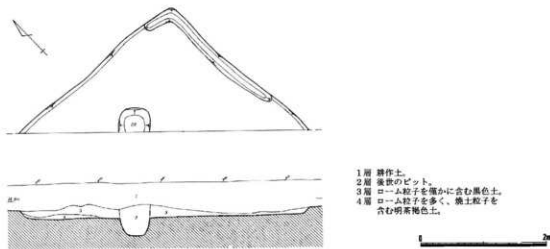
内外面黒色研磨された坏形土器である。磨き調整については、非常に細密であるため、敢えて図示しなかったが、内外面横方向に施されている。胎土には白色微粒子・石英を含む。

23号住居跡 (第19図)

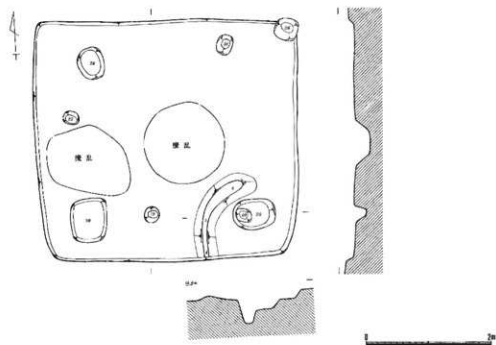
〔住居構造〕 住居内の2か所が後世の掘り込みにより壊されている。(平面形) 正方形。(規模) 4.20×3.90m。(壁高) 8~14cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際を除いて硬化していた。(柱穴) 主柱穴と思われるものは、検出されなかった。また、南壁寄りの深さ19cmのピットは、入口部の梯子穴と思われる。(貯蔵穴) 南東コーナーに位置する。70×50cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。貯蔵穴の西側には、幅34~40cm・高さ4~5cmの「L」字状の凸堤が巡っている。南西コーナーにある掘り込みも貯蔵穴の可能性もある。70×60cmの長方形を呈し、深さ30cmを測る。(覆土) ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 砥石1点と須恵器が数点出土した。

〔時期〕 平安時代(9世紀後半)。



第18図 14号住居跡 (1/60)



第19図 23号住居跡（1/60）

23号住居跡出土遺物（第21図2～5）

2は須恵器環形土器である。現器高3.7cm、推定口径12.0cm。ロクロ回転は右回転。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・暗茶褐色粒子を含む。覆土中からの出土で、口縁部から体部にかけて1/5程度残存する。

3・4は須恵器甕形土器の胴部小破片である。3は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。外面には平行叩き目痕が残る。4は色調が暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はナデ調整後磨きが施され、光沢をもつ。外面には平行叩き目痕が残る。

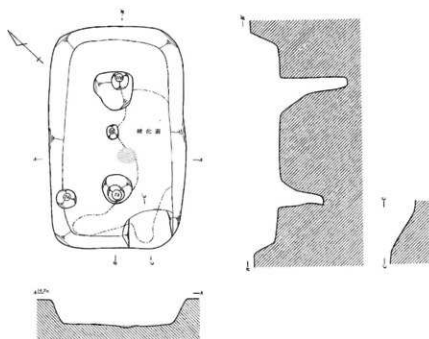
5は砥石である。長さ12.2cm、最大幅4.0cm、高さ4.2cm、重さ261g。使用面は短軸2側面を除いた4面で、短軸の断面形は台形を呈する。長軸では片面が弓状に曲線を呈し、よく使用されたことがわかる。また、所々に刃部によると思われる細線状の使用痕が観察される。

24号住居跡（第20図）

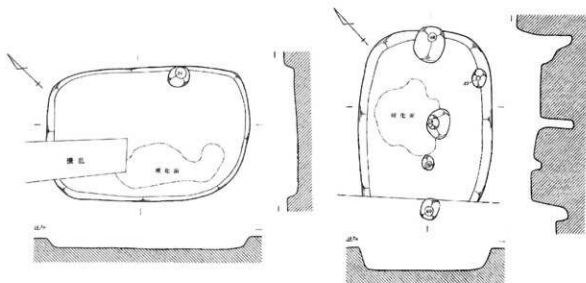
〔住居構造〕（平面形）長方形。（規模）3.60×2.20m。（壁高）34～43cmを測り、急斜に立ち上がる。南コーナーは60×85cmの範囲でスロープ状になっている。（壁溝）検出されなかった。（床面）南壁寄りからスロープを含め、西壁にかけてL字状に硬化面が確認できた。中央付近の床が一部焼けて赤化していた。（柱穴）長軸中央に並ぶ柱穴が本遺構のものと考えられる。（覆土）上層は焼土粒子を僅かに、ローム粒子を含む黒褐色土、下層は焼土粒子・炭化材を多く、ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。特に床面上からは、焼土・炭化材が多く検出された。

〔遺物〕覆土中から、土師器・須恵器の小破片が出土した。

〔時期〕平安時代（9世紀後半か）。



24号住居跡

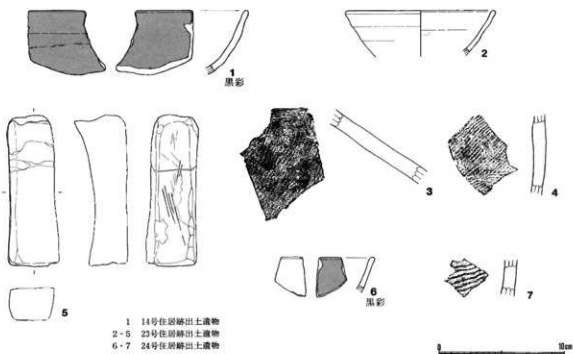


25号住居跡

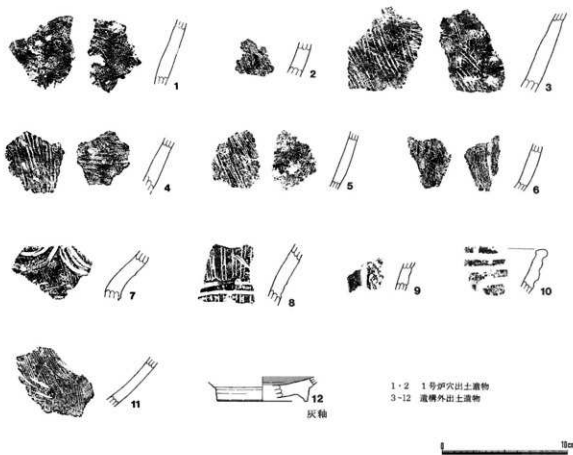
26号住居跡



第20図 24・25・26号住居跡 (1/60)



第21图 住居跡出土遺物 (1/3)



第22图 1号炉穴・遺構外出土遺物 (1/3)

[所見] 床面上から焼土及び炭化材が多く検出されていることより、焼失住居と考えられる。

24号住居跡出土遺物 (第21図 6・7)

6は環形土器の口縁部小破片で、黒色土器である。内外面は横方向に細密な研磨が施され、内面に黒色処理が施される。胎土には砂粒・石英を僅かに含む。覆土中からの出土である。

7は須恵器甕形土器の胴部小破片である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はナデ調整が施され、外面には平行叩き目痕が残る。覆土中からの出土である。

25号住居跡 (第20図)

[住居構造] 西コーナー付近が攪乱により壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 3.25×2.17m。(壁高) 13~17cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 南コーナーから南西壁付近が良く硬化していた。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 土器小破片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 出土した土器小破片から、平安時代(9世紀以降)と考えられる。

26号住居跡 (第20図)

[住居構造] 南西側は攪乱により壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×2.15m。(壁高) 22~39cmを測り、急斜に立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 中央から北西壁付近が、良く硬化していた。(柱穴) 長軸中央に並ぶ柱穴が本遺構に関係するものと考えられる。(覆土) ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 土器小破片が数点出土したが、図示できるものはなかった。

[時期] 出土した土器小破片から、平安時代(9世紀以降)と考えられる。

(3) 遺構外出土遺物 (第22図 3~12、図版 7-5-1~6)

縄文・弥生時代の土器と中・近世の陶・磁器の破片が検出されている。縄文時代の土器の時期については、早期~晩期にかけてに比定される。全体で第1~8群に分類された。

第1群 縄文時代早期後葉の条痕文系土器(3~6)

すべて胎土に繊維を含む表裏条痕の土器である。3の外面の条痕文は上方が横方向、下方が斜方向に施される。4~6は縦方向または斜方向である。

第2群 縄文時代中期後葉の連弧文系土器(7・8)

7・8は縦位の条線を地文に文様が描かれる土器である。7は胴部のくびれ部付近の破片で、1本単位の沈線による条線を地文に連弧文が描かれている。色調は薄茶色を呈し、胎土には白色砂粒を多く、金雲母を僅かに含む。8は胴部破片で、竹管文による条線を地文に横位に2本の沈線文が施されている。色調は薄茶色を呈し、胎土には砂粒を含む。

第3群 縄文時代中期後葉の加曾利E式土器(9)

胴部小破片で、LRの単節斜縄文を地文に磨消懸垂文が描かれる土器である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には淡橙色粒子・暗茶褐色粒子を含む。

第4群 縄文時代晩期(10)

口縁部小破片で、幅5mmの太い沈線により文様が描かれている。沈線は基本的に口縁に平行する横位

沈線であるが、上から3本目については途中で下方に曲線を描いている。沈線表現による変形工字文であろうか。色調は明茶褐色を呈し、胎土には白色砂粒を多く含む。

第5群 弥生時代後期の土器 (11)

甕形土器の胴部破片である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・黄褐色粒子・暗茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面は斜方向のハケ目調整が施される。

第6群 中・近世の陶・磁器 (第22図12、図版7-5-1~6)

第22図14は瀬戸の高台付の灰釉皿である。現器高2.0cm、推定底径7.2cm。時期は17~18世紀である。

図版7-5の1は香炉の口縁部小破片であろう。時期は14~15世紀である。

2は備前系の播鉢の口縁部小破片である。時期は19世紀代であろう。

3は青磁皿の底部小破片で、底部は碁笥底を呈する。精練された胎土から、中国製と考えられる。時期は14世紀代である。

4は肥前系の染付皿である。底部は削り出し高台で、砂目痕を残す。内面は蛇の目剥ぎが施され、文様は草花文である。時期は17世紀代である。

5は肥前系の磁器碗の口縁部小破片である。磁器は18~19世紀代であろう。

6は磁器の急須蓋で、文様は風景文である。産地は瀬戸か。

第5章 中道遺跡第27地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

平成4年7月、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町5丁目2978-1番地（面積632.90㎡）内に駐車場建設を行うというものである。

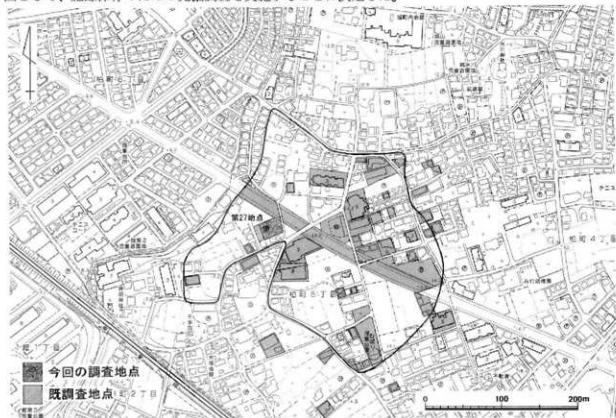
これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中道遺跡（コード11228-005）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成4年7月7日、教育委員会は、開発者より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、9月9日、午前9時15分から確認調査を実施した。

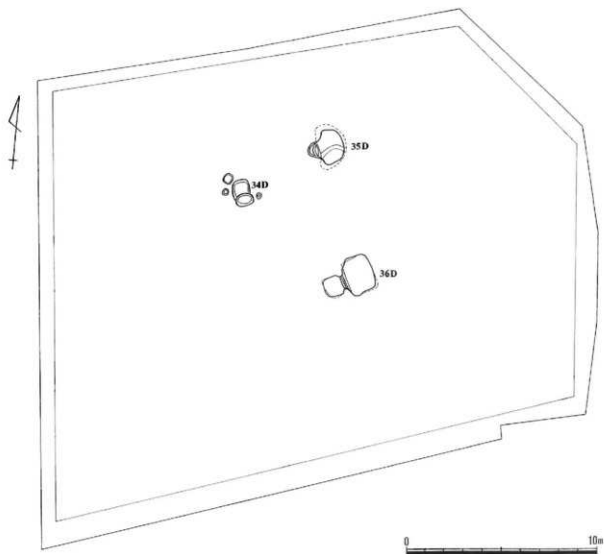
確認調査は、調査区のほぼ南北方向に4本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、地下式坑と思われる深い遺構2基と土坑1基を確認した。

そのため、教育委員会は、この結果を開発者に報告し、再度協議をしたところ、埋蔵文化財の保存措置として、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。



第23図 周辺の地形と調査地点（1/5000）

平成11年12月31日現在



第24図 遺構分布図（1/200）

その後、開発者により、埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、9月21日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第5の1537号 平成5年3月16日付である。

（2）発掘調査の経過

人員導入による発掘調査は、平成4年9月21日から開始した。すでに、9月9日の確認調査の際に、調査区域の表土剥ぎが終了していたため、まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。

22日、土坑（34D）と地下式坑と思われる遺構（35・36D）の精査を開始する。35・36Dはいずれも天井部が崩落した地下式坑であることが判明した。34Dについては、完掘後、写真撮影を行い、実測を終了した。

24日、35Dの掘りを終了し、写真撮影を行い、その後実測を終了した。

25日には、36Dの掘りを終了し、写真撮影を行い、実測を終了、すべての調査を完了した。

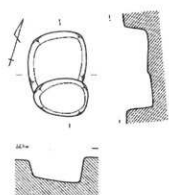
28日、埋め戻し作業を完了する。

第2節 検出された遺構と遺物

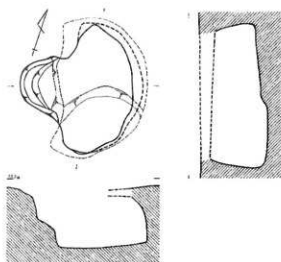
(1) 土坑

34号土坑 (第25図)

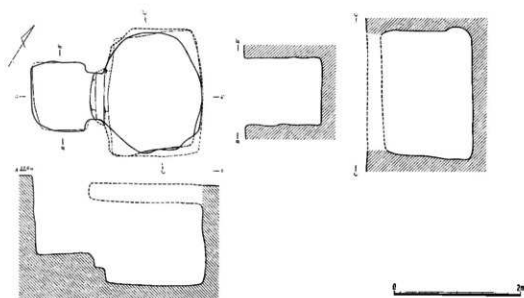
[構造] 2個の重複形態をとる。(平面形) 不整形。(規模) 1.40×0.95 m。(長軸方位) $N-22^\circ-W$ 。(深さ) 40cm前後を測る。坑底はほぼ平坦であるが、中央付近で僅かに段差を生じている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。



34号土坑



35号土坑



36号土坑

第25図 34・35・36号土坑 (1/60)

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

35号土坑（第25図）

〔構造〕 地下式坑である。主体部天井は崩落していた。（入口竪坑部）開口部は台形状を呈し、80×55 cmを測る。主体部への連絡は階段状を呈する。入口部と主体部が一体化した感じである。（主体部）平面形は半円形を呈し、主軸に対して横長の形態をとる。底面は北側から南側へ緩やかに下り、中央付近から南半分は10cm程低く段差がついている。壁は上方でやや内傾しており、天井部は陥落していたが高さは65～90cm程であったと思われる。（覆土）大部分が天井部崩落後に埋まったものである。天井部ロームより上層は黒色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 磁器・瓦器の小破片を1点ずつと石臼の破片を1点出土した。

〔時期〕 中世（14世紀後半から15世紀か）。

35号土坑出土遺物（図版9-5）

1は青磁碗の口縁部小破片である。精練された胎土から中国製であるものと思われる。色調は灰白色を呈し、胎土には黒色微粒子を僅かに含む。覆土中からの出土である。時期は13世紀後半から14世紀にかけてに比定される。

2は常滑鉢の口縁部小破片であろう。胎土には白色砂粒を多く含む。覆土中からの出土である。時期は14世紀後半から15世紀にかけてに比定される。

3は石臼の下臼（下盤）の破片と思われる。

36号土坑（第25図）

〔構造〕 地下式坑である。主体部天井は崩落していた。（入口竪坑部）開口部は1.10×0.85mの隅丸長方形を呈し、坑底は平坦で、壁は垂直に近い。確認面からの深さは1.20mを測る。主体部への連絡は階段状になっており、比高差は45cm程である。（主体部）2.05×1.50mの長方形を呈し、主軸に対して横長の形態をとる。底面は平坦で、壁は下方に少し膨らみをもつ。天井部は崩落していたが高さは1.40m前後であったと思われる。（覆土）天井部ロームより上層は黒色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 常滑鉢の小破片を1点出土した。

〔時期〕 中世（15世紀代か）。

36号土坑出土遺物（図版9-4）

常滑鉢の小破片であろうか。胎土には砂粒・小石を含む。時期は小破片のため詳細不明であるが、中世（15世紀代か）に比定される。

（2）遺構外出土遺物（第26図）

縄文時代の土器の小破片が7点検出されている。時期的には前期～後期にかけてに比定され、第1～4群土器に分類された。

第1群土器 前期中葉の羽状縄文系土器（1）

5段の羽状縄文が施文される繊維土器である。色調は黒褐色を呈する。

[遺物] 出土しなかった。

[時期] 不明。

35号土坑（第25図）

[構造] 地下式坑である。主体部天井は崩落していた。（入口竪坑部）開口部は台形状を呈し、80×55cmを測る。主体部への連絡は階段状を呈する。入口部と主体部が一体化した感じである。（主体部）平面形は半円形を呈し、主軸に対して横長の形態をとる。底面は北側から南側へ緩やかに下り、中央付近から南半分は10cm程低く段差がついている。壁は上方でやや内傾しており、天井部は陥落していたが高さは65～90cm程であったと思われる。（覆土）大部分が天井部崩落後に埋まったものである。天井部ロームより上層は黒色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 磁器・瓦器の小破片を1点ずつと石臼の破片を1点出土した。

[時期] 中世（14世紀後半から15世紀か）。

35号土坑出土遺物（図版9-5）

1は青磁碗の口縁部小破片である。精錬された胎土から中国製であるものと思われる。色調は灰白色を呈し、胎土には黒色微粒子を僅かに含む。覆土中からの出土である。時期は13世紀後半から14世紀にかけてに比定される。

2は常滑鉢の口縁部小破片であろう。胎土には白色砂粒を多く含む。覆土中からの出土である。時期は14世紀後半から15世紀にかけてに比定される。

3は石臼の下臼（下盤）の破片と思われる。

36号土坑（第25図）

[構造] 地下式坑である。主体部天井は崩落していた。（入口竪坑部）開口部は1.10×0.85mの隅丸長方形を呈し、坑底は平坦で、壁は垂直に近い。確認面からの深さは1.20mを測る。主体部への連絡は階段状になっており、比高差は45cm程である。（主体部）2.05×1.50mの長方形を呈し、主軸に対して横長の形態をとる。底面は平坦で、壁は下方に少し膨らみをもつ。天井部は崩落していたが高さは1.40m前後であったと思われる。（覆土）天井部ロームより上層は黒色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 常滑甕の小破片を1点出土した。

[時期] 中世（15世紀代か）。

36号土坑出土遺物（図版9-4）

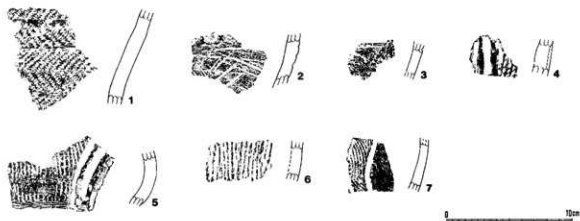
常滑甕の小破片であろうか。胎土には砂粒・小石を含む。時期は小破片のため詳細不明であるが、中世（15世紀代か）に比定される。

（2）遺構外出土遺物（第26図）

縄文時代の土器の小破片が7点検出されている。時期的には前期～後期にかけてに比定され、第1～4群土器に分類された。

第1群土器 前期中葉の羽状縄文系土器（1）

5段の羽状縄文が施文される繊維土器である。色調は黒褐色を呈する。



第26図 遺構外出土遺物(1/3)

第2群土器 前期後葉の竹管文系土器(2・3)

いずれも半截竹管により連続山形文を基調とした文様が施文される土器である。2は黒褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く含む。3の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。

第3群土器 中期後葉の加曾利E式土器(4~6)

4は胴部小破片で、Lの燃糸文を地文に2本1単位の降帯による懸垂文が施文されている。5は口縁部付近の破片で、Lの燃糸文を地文に2本1単位の降帯による曲線的な文様が描かれている。6は胴部小破片で、Lの燃糸文を地文とする。裏面は大部分剥落している。

第4群土器 後期前葉の称名寺式土器(7)

帯縄文によるJ字文風の文様が施文される土器である。帯縄文内はLRの単節斜縄文が充填されている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。

[参考文献]

- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集 志木市遺跡調査会
 佐々木保俊 1996「第9章 中道遺跡第21地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会
 尾形則敏 1989「第4章 中道遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会
 1992「第2章 中道遺跡第12地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
 1992「第3章 中道遺跡第13地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集 志木市教育委員会
 尾形則敏・深井恵子 1996「第3章 中道遺跡第33地点の調査」『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
 1997「第6章 中道遺跡第36地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
 1997「第7章 中道遺跡第37地点の調査」『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
 1999「第7章 中道遺跡第41地点の調査」『志木市遺跡群Ⅸ』志木市の文化財第27集 志木市教育委員会
 野沢 均・尾形則敏 1996「第13章 中道遺跡第26地点の調査」『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会

第6章 大原遺跡第1地点の調査

第1節 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

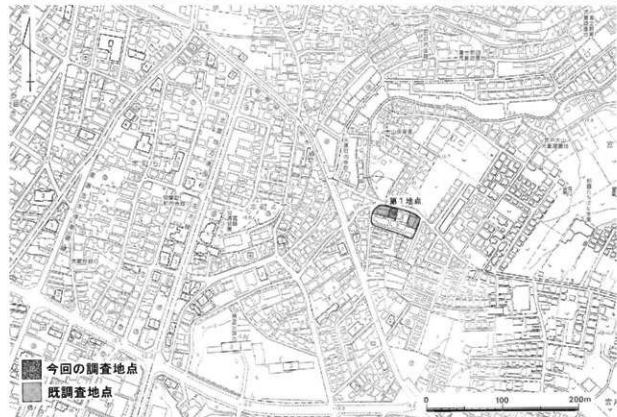
平成5年9月20日、開発主体者から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市本町4丁目1015-2、47、48番地（面積160.25㎡）内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が、志木市遺跡分布図に示した遺跡の存在する可能性が高い地域に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、遺跡の立地条件からみて、遺跡の存在する可能性があること。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

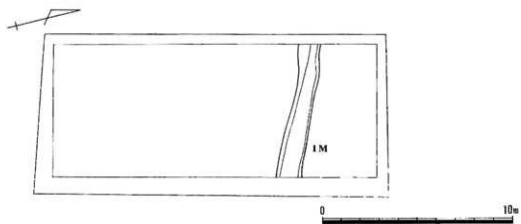
平成5年10月15日、教育委員会は、開発者より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、10月13日、午前9時15分から確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸中央に1本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認

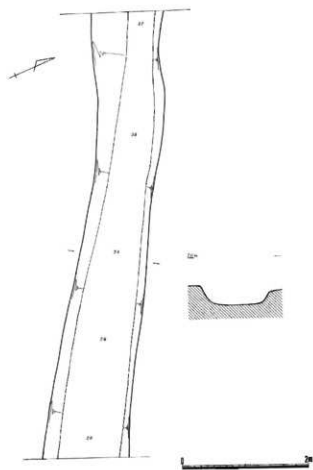


第27図 周辺の地形と調査地点（1/5000）

平成11年12月31日現在



第28图 遺構分布図 (1/200)



第29图 1号溝跡 (1/60)

作業を行った結果、溝跡と思われる遺構1基を確認した。

そのため、教育委員会は、この結果を開発者に報告し、再度協議をしたところ、埋蔵文化財の保存措置として、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。

その後、教育委員会では、本地点における遺跡として、新規に大原遺跡に登録する書類を埼玉県教育委員会に提出した。また、開発者により、埋蔵文化財発掘届が提出されたため、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、10月18日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第5の1760号 平成5年12月8日付である。

（2）発掘調査の経過

人員導入による発掘調査は、平成5年10月18日から開始した。すでに、10月13日の確認調査の際に、表土剥ぎが終了していたため、まずは調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、遺構は調査区北端部にはば東西に走向する溝跡（1M）であることが判明した。なお、残土置場には調査区南半部の遺構が確認されなかった場所を当てることにした。

その後、1Mの精査を開始するが、午前中でほぼ完掘したため、午後からは写真撮影・実測を終了し、すべての調査を完了した。1Mの時期については、出土遺物が無かったため、詳しいことは不明であるが、覆土の観察から、近世以降のものと思われる。

20日、埋め戻し作業を完了する。

第2節 検出された遺構

1号溝跡（第29図）

〔構造〕調査区北端部から検出された。確認できる範囲での長さは7.30m、上幅104～138cm、下幅42～98cm、深さ26～38cmを測る。清底はほぼ平坦で、断面形は基本的に扁平な台形状を呈している。覆土はローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕出土しなかった。

〔時期〕覆土の観察から、近世以降と思われる。

たが、⑤からすべて主軸方向を同一方向あるいは直交させるものに含まれることや第21・25地点の北西隅に集中する傾向にあることから、これらは、ある一定の秩序をもった群として構成され、偶発的な所産のものではないと考えられる。

以上、ここでは、21・22・24～26号住居跡、12号土坑Aについての本来の機能については触れることはできなかったが、これらについては通常の住居跡ではない特徴をもつことから、住居跡に付随する小屋や納屋のような施設であったのではないかと考えたい。今後は、今回問題にしなかったビット群についても同様なレベルで考える必要もあり、結論的には尽きることのない課題となりそうである。機会があれば、類例の蓄積を待って、改めて論じたいものと考えている。

4. 中道遺跡第27地点から検出された地下式坑について

中道遺跡においては、今までの発掘調査で、志木市内でも比較的に多く中・近世の遺構が検出されている。ここでは、中道遺跡第27地点の2基の地下式坑と同時期に比定されると考えられる地下式坑・土坑墓が、隣接する中道遺跡第2地点I区から検出されていることに注目したい。

中道遺跡第2地点は、昭和62（1987）年に都市計画道路富士見・大原線（ユリノ木通り）に伴い発掘調査が実施されているが、その際に、中世から近世にかけての遺構として、土坑5基、地下式坑2基、溝跡14本、ビット群などが検出されている。そして、地下式坑（16・19号土坑）と土坑墓（20号土坑）からは、14～15世紀にかけての常滑甕の破片や人骨片・渡来銭などが出土していることから、I区の一部の領域には、中世の墓地的な性格の場所在するものと想定することができる。

つまり、今回の第27地点から検出された地下式坑との時代にも符号することを考えると、地点的には隣接しているが、むしろ同エリア内にこれらが一群として存在すると言っても過言ではない。しかし、今回の第27地点の2基の地下式坑からは、人骨など埋葬に関連する遺物は検出されなかったため、結論的には墓機能をもつ施設とは断定できなかったが、今後は周辺地域との結び付きで、総合的な把握が要求されるものと考えられる。

〔参考文献〕

- 根本 靖 1999「所沢市東の上道跡の基礎研究Ⅱ」『あらかわ』第2号 あらかわ考古談話会
渡辺 一 1988『鳩山窯跡群Ⅰ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
1991『鳩山窯跡群Ⅲ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
1992『鳩山窯跡群Ⅳ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
佐々木保俊・尾形剛敏 1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集 志木市遺跡調査会

圖 版



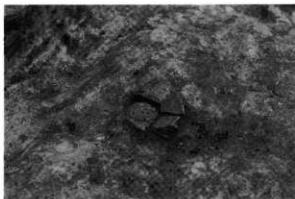
1. 調査区近景



2. 発掘調査風景



3. 18号住居跡遺物出土状態



4. 18号住居跡遺物出土状態



5. 18号住居跡



1. 18号住居跡



2. 18号住居跡カマド (掘り方)



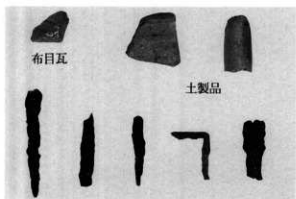
3. 10号土坑



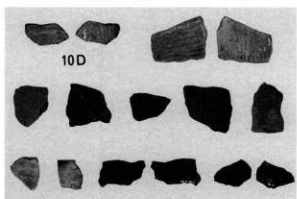
4. 11号土坑



5. 18号住居跡出土遺物



6. 18号住居跡出土遺物



7. 10号土坑・遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘調査風景



3. 19号住居跡遺物出土状態



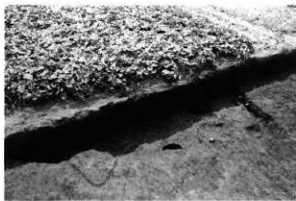
4. 19号住居跡カマド



5. 19号住居跡



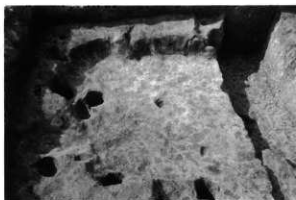
1. 20号住居跡遺物出土狀態



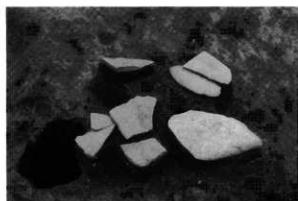
2. 20号住居跡



3. 21号住居跡



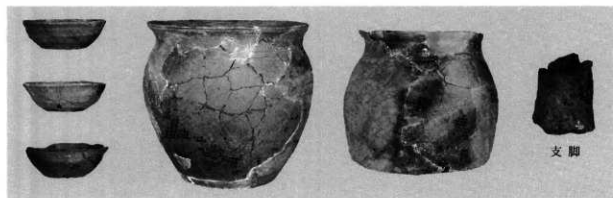
4. 22号住居跡



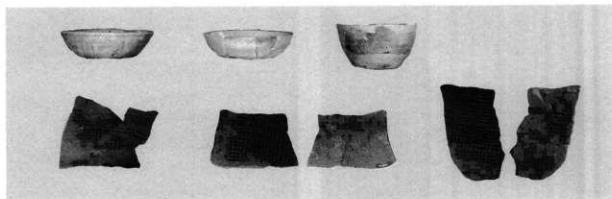
5. 12号土坑A遺物出土狀態



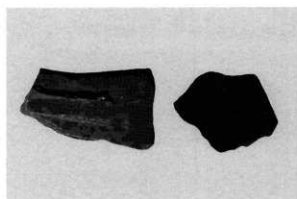
6. 12号土坑A遺物出土狀態



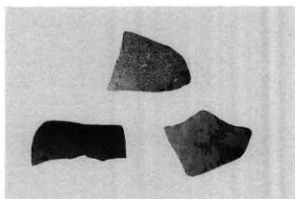
7. 19号住居跡出土遺物



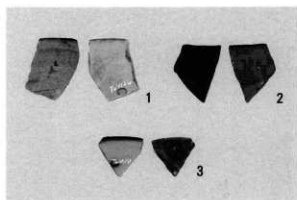
1. 20号住居跡出土遺物



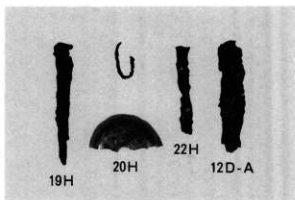
2. 21号住居跡出土遺物



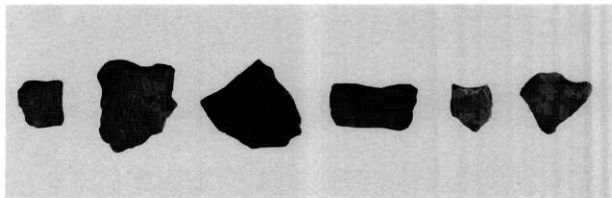
3. 12号土坑A出土遺物



4. 12号土坑B出土遺物



5. 鉄製品・石製品



6. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘調査風景



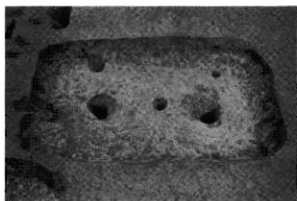
3. 1号炉穴



4. 14号住居跡



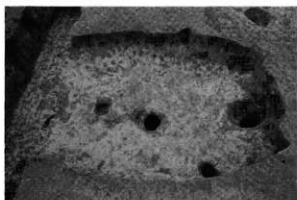
5. 23号住居跡



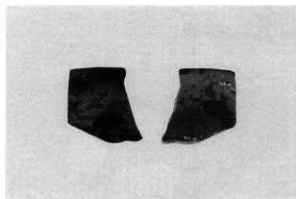
6. 24号住居跡



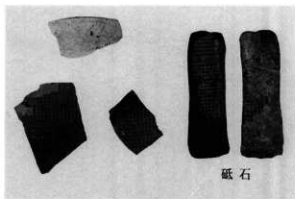
7. 25号住居跡



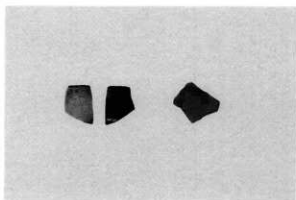
8. 26号住居跡



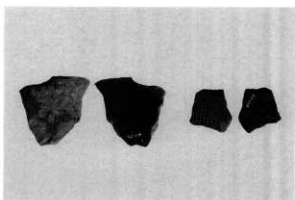
1. 14号住居跡出土遺物



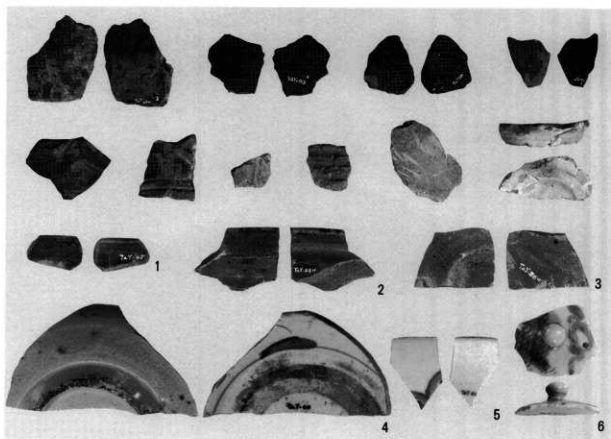
2. 23号住居跡出土遺物



3. 24号住居跡出土遺物



4. 1号炉穴出土遺物



5. 遺構外出土遺物



1. 確認調査区風景



2. 発掘調査風景



3. 36号土坑



4. 36号土坑



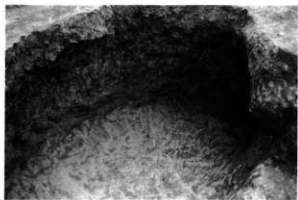
5. 36号土坑



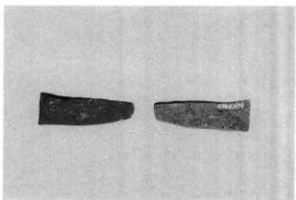
1. 34号土坑



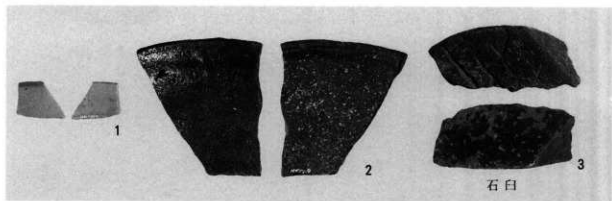
2. 35号土坑



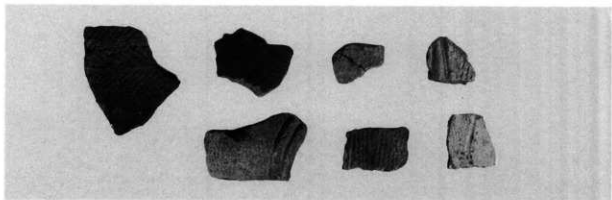
3. 35号土坑



4. 36号土坑出土遗物



5. 35号土坑出土遗物



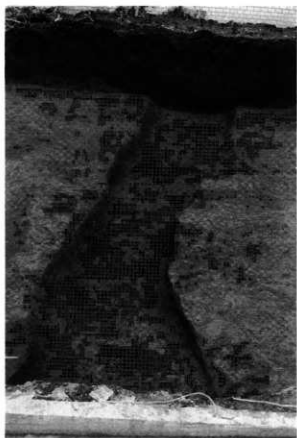
6. 遺構外出土遺物



1. 調査区近景



2. 発掘調査風景



3. 1号溝跡



4. 1号溝跡

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	埋蔵文化財調査報告書 1						
副書名						巻次	
シリーズ名	志本市の文化財					巻次	第29集
編著者名	尾形 則敏 深井 恵子						
編集機関	埼玉県志本市教育委員会						
所在地	〒353-0002 埼玉県志本市中宗岡1丁目1番1号 TEL. 048(473)1111						
発行年月日	平成12(2000)年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道跡番号	(°'")	(°'")	(㎡)	
たごやまいせき	しきしほんちよう			35°	139°	19920629	
田子山遺跡 (第19地点)	志本市本町 2丁目1698-21	11228	010	49'	35'	～ 19920721	63.54 共同住宅建設
たごやまいせき	しきしほんちよう			35°	139°	19920907	
田子山遺跡 (第21地点)	志本市本町 2丁目1690-4	11228	010	49'	35'	～ 19920921	104.20 道路造成工事
たごやまいせき	しきしほんちよう			35°	139°	19930122	
田子山遺跡 (第25地点)	志本市本町 2丁目1690-1	11228	010	49'	35'	～ 19930319	856.00 共同住宅建設
なかみちいせき	しきしほんちよう			35°	139°	19920909	
中道遺跡 (第27地点)	志本市柏町 5丁目2978-1	11228	005	49'	34'	～ 19920928	632.90 駐車場建設
おおはらいせき	しきしほんちよう			35°	139°	19931013	
大原遺跡 (第1地点)	志本市本町 4丁目1015-2他	11228	005	49'	35'	～ 19931024	160.25 共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
田子山遺跡 (第19地点)	集落	縄文時代 平安時代 近世?	土坑 住居跡 土坑	2基 1軒 2基	土器 土師器・須恵器 なし		
田子山遺跡 (第21地点)	集落	平安時代	住居跡 土坑	4軒 2軒	須恵器		
田子山遺跡 (第25地点)	集落	縄文時代早期 平安時代	炉穴 住居跡	1基 5軒	土器 なし		
中道遺跡 (第27地点)	集落	中・近世	地下式坑 土坑	2基 1基	なし なし		
大原遺跡 (第1地点)	集落	不明	溝跡	1本	なし		

志木市の文化財 第29集

埋蔵文化財調査報告書 1

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成12(2000)年3月31日